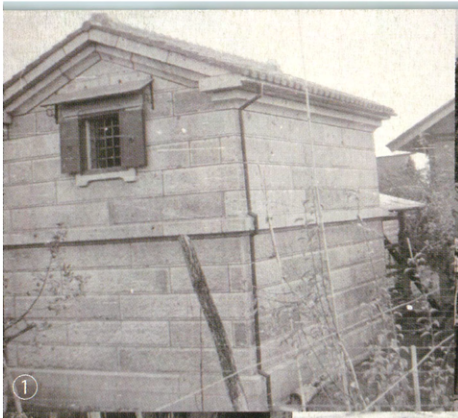
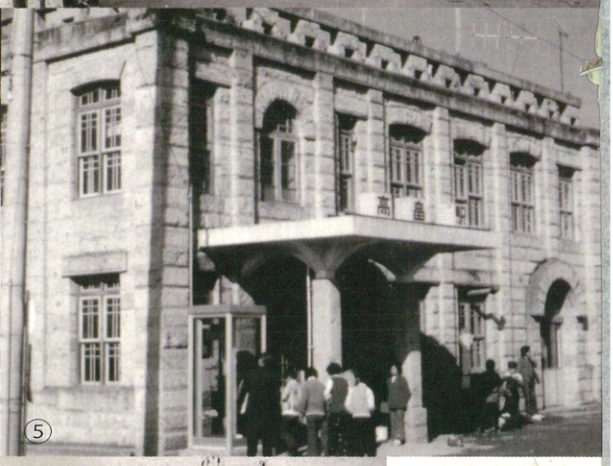

高畠石の里をあるく
たかはた


①


②

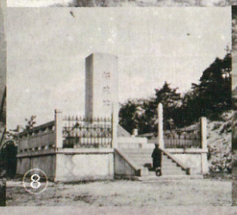

③


④


⑤


⑦


⑥


⑧


⑨


⑩



⑪


⑭


⑬


⑫


⑰


⑱


⑮


⑯


⑲


㉑



⑳

はじめに

第一章　高畠石の里
- 自然と人が織りなす豊かな暮らし …… 4
- 年表からみる高畠町 …… 5
- 空からみた高畠町 …… 6

第二章　町並みのむかしといま
- 二井宿街道の町並みと村の暮らし …… 8

第三章　石切り・石工の技術
- 採掘の歴史 …… 12
- 採掘方法と流通 …… 13
- 石工の仕事 …… 15
- 最後の石工―後藤初雄 …… 16
- 石屋の息子は石屋だ―引地兼二 …… 18
- 1日3本採る石工―阿部富弥 …… 20
- 石切りと共に歩んだ人生―大地昭博 …… 22
- 二足のわらじ―森谷広衛 …… 24
- 先駆者を顕彰した石材記念碑 …… 26

第四章　石とともにある暮らし
- まちあるき調査概要 …… 28
- 変化する石塀のカタチ …… 34
- それぞれの石蔵 …… 36
- 水と生活と高畠石 …… 38
- ナツカワのある庭 …… 40
- 失われたサイロを求めて …… 42
- 屋敷明神は語る …… 44
- 生活と共にあった高畠石 …… 46

第五章　石の里の魅力
- 石の里の魅力―伝えたいもの、こと …… 48

はじめに

高畠の町並みには人をひきつける魅力があります。私たちはその魅力の一端を探るため住宅で使われている「高畠石」に焦点をあて、平成 23 年度から月 1 回「高畠まちあるき」の活動を続けてきました。調査は 1 軒 1 軒のお宅にお邪魔して、屋敷内で使われている高畠石のすべてを記録するとともにその来歴等を伺う作業でした。安久津・二井宿住民の皆様の全面的な協力のもと、「高畠石の会」「高畠町教育委員会」「東北芸術工科大学」の三者が一体となって実施したものです。ご協力いただいた方々に心よりの感謝を申し上げます。

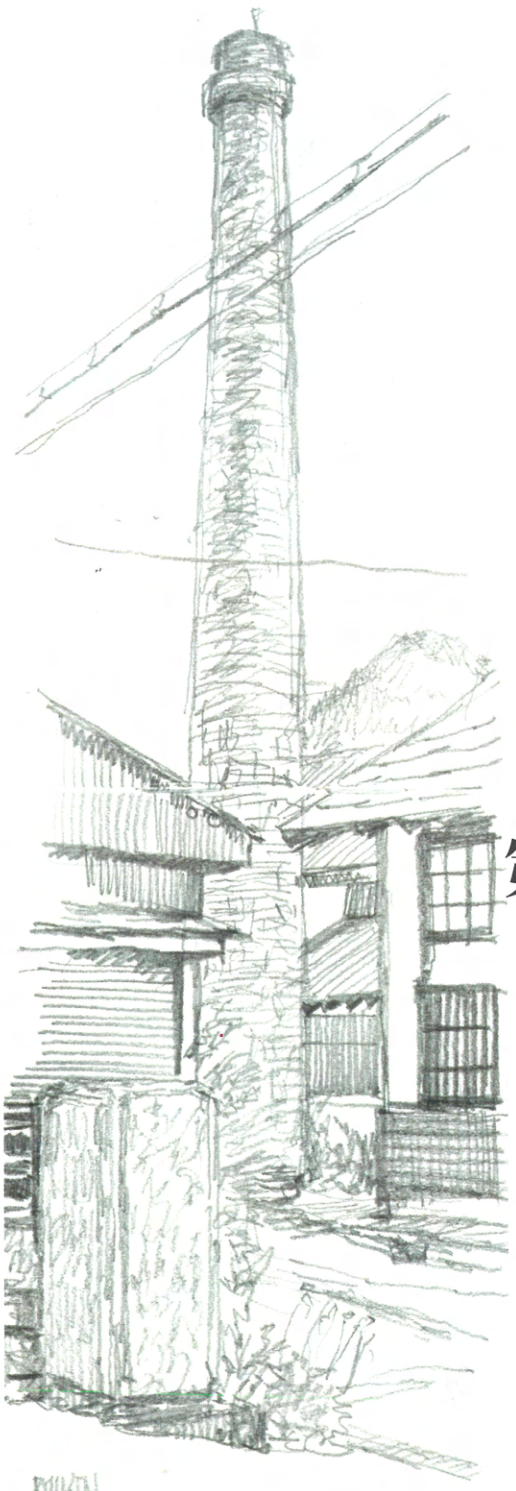
プロジェクトに参加した学生は 3 年間で延べ 216 人に達し、そのつど地域の方々と世代を越えた対話、交流を持たせていただきました。若者たちはひたむきに生きてきた職人たちの語りに心を打たれ、日常のありふれた風景や住民にとっての当たり前の暮らしの中から、自分たちが生きる現代をみつめ、未来を展望する手がかりをいくつも得ることができました。

本書は高畠石からみた二井宿街道の町並み景観の特徴と文化的価値について、調査データをもとに学生スタッフと文化財保存修復研究センター研究員が分担執筆したものです。ご教示いただいた情報を十分生かし切れていない点や誤謬もあるかと思いますが、ご一読いただければ幸いです。

「高畠石の里をあるく」編集スタッフ一同



本調査は、東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターが文部科学省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」の採択を受けて平成 22 年度から行っている「複合的保存修復活動による地域文化遺産の保存と地域文化力の向上システムの研究」の一環として実施したものです。



2012
鵜・鵜 ～米鶴酒造の門柱と煙突

第一章　高畠石の里

自然と人が織りなす豊かな暮らし

高畠石とは

高畠町の原風景を想い起こす時、欠かせないものの一つに石切り場があります。白い岩肌と緑濃い赤松林が青空に映えるその風景は「石の町ーたかはた」の象徴するものです。「高畠石」は町内で産出する凝灰岩の総称で、加工しやすく火に強い性質を持ちます。ツルハシのような道具で採掘する伝統的な石切りは江戸後期に始まり、家の土台、舗石、護岸など、土木・建築用材として幅広く利用されてきました。かつては採石地の字名をとって「大笹生石」や「沢福等石」「瓜割石」などと呼ばれました。

有機農業のふるさと

高畠町（平成 26 年 1 月現在人口 24,837 人）は米沢盆地の東側に位置し、町域の東部には約 1,000 万年前の火山活動でできた凝灰岩を基盤とする丘陵が広がります。ここから流下する屋代川、和田川、砂川、天王川がその風化土壌を下流に運び、それら河川が西部の平野を潤しています。内陸盆地特有の昼夜の大きな寒暖差、夏の豊富な日照・少雨の気候のなかで、水稲を中心としつつも、土地の自然条件にあわせた畑作や酪農、果樹栽培（ぶどう、洋なし、りんご）、林業などを組み合わせ、環境に適応した複合的な農業を営んできました。乳製品やワイン、ジュースなどの農産加工品の生産も盛んです。明治になると養蚕が盛んになり、昭和 30 年代までは多くの農家が蚕を飼っていたといわれます。

高畠町は「有機農業のふるさと」として有名で、毎年たくさんの若者が都会から農業体験に訪れます。1973 年から若い農業者たちが中心となり、人間と自然にやさしい有機農業に取り組み、その実践はドキュメンタリー映画「いのち耕す人々」やスタジオジブリ製作の映画「おもいでぽろぽろ」の青年トシオを通して、全国に知られるところとなりました。これは農業のあり方を通して、自然との共生、持続的な資源利用、食の安全性など、人間の生き方に関わる今日的課題を問うものでした。有機農業運動を生み出す精神的基盤が現在も町民の暮らしの底流に深く根付いているように感じられます。



瓜割丁場　石工らの長い年月の営みが年縞のように刻まれる

一方で 10 年前に 30％あった農林業従事者の割合は現在 16％に減少しました。高齢化、担い手不足、耕作放棄地など、地方の農村が抱える問題はここでも無縁ではありません。

高畠石と遺跡

高畠町では丘陵の山肌に巨岩が露出する風景が各所にみられます。氷河期の終わり頃（約 13,000 年前）、岩陰や洞窟を利用して最初の定住集落が出現しました。大谷地の湿地を望む日向洞窟（国指定史跡）はその代表的なものです。狩猟採集社会では異なる生態系が接触するこのような場所が資源に恵まれた暮らしやすい場所でした。

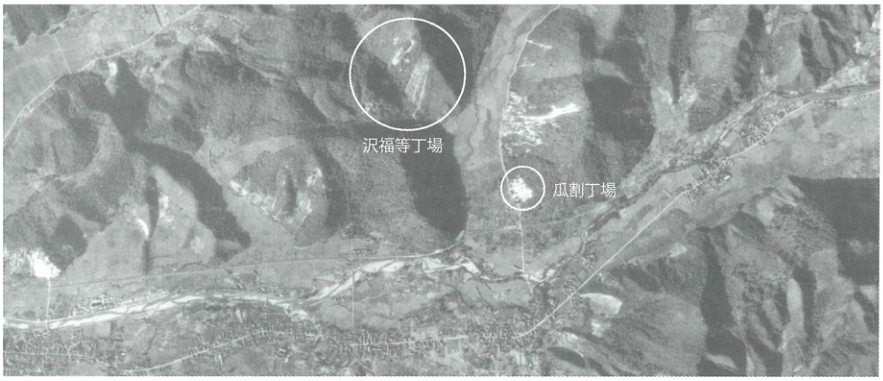
飛鳥時代（1,350 年前）には、石材が古墳の石室構築の格好の材料となり、羽山丘陵には安久津古墳群のような古墳の密集地帯が形成されました。鎌倉時代以降はたくさんの石仏や石塔、墓石、石鳥居が立てられ、民衆があつい信仰を寄せてきました。これらの文化遺産は今も町内のあちこちに姿をみせ、山地と平地が織りなす独特の地形とあわせ、「高畠らしさ」を象徴する風景となっています。（北野）



置賜盆地の表層地質図
東側に凝灰岩が分布し、石切り場が点在する

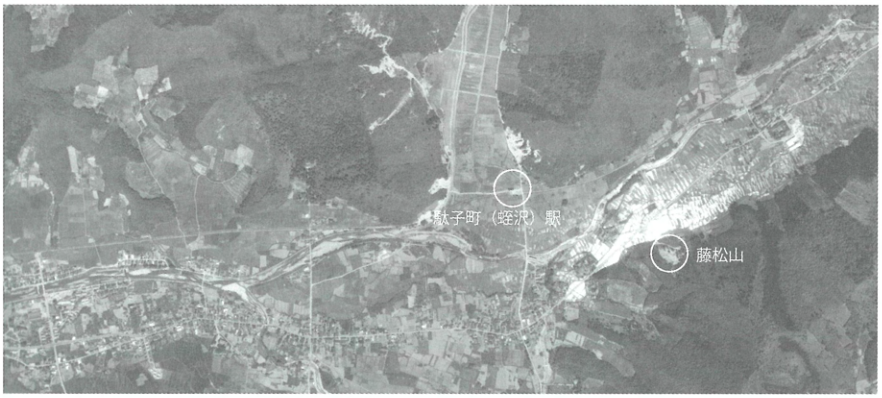
	高畠石	生業	インフラ	災害	町制
江戸後期	江戸後期には大笹生で石切りが行われる 嘉永 5　石番小屋が造られる	元禄 17　米鶴創業			
明治	慶応元　沢福等にて石切り始まる M3　大笹生、石工 21 人と記録される M39　東置賜郡招魂碑を北目山に建設 M43 ～ 5　大笹生、石工 50 人と記録される	M8 加工用として洋梨の栽培開始 M15　屋代村の長谷川平内、器械製糸場を開設する M31　高畑町、東置賜郡役所前で乳牛のセリ市が行われる M35　高畑産牛組合結成、会長は安藤庄太郎 M45　梅津勇太郎氏二井宿村の自宅裏にバター、乾乳糖工場設置	M12 高畑村幸橋架橋起工・竣工	M24　二井宿村大火役場・巡査駐在所・民家 59 戸焼失 M43　二井宿村大火字戸数の 64%である 84 戸焼失	M4　廃藩置県により米沢藩が米沢県になるその後置賜県と改称 M6 安久津八幡が郷社に昇格 M9　置賜県、第三次山形県に編入される M22　明治の村々大合併により新村誕生 高畑村 (7 ヶ村) 二井宿村・屋代村 (10 ヶ村) 亀岡村 (4 ヶ村) 和田村 (5 ヶ村) 糠野目村 (9 ヶ村) M28　高畑村、町制を施行し高畑町と改称 M38　高畑町を高畠町と改称
大正	T9　県内初の石造サイロが鳥居町に出来る T14　瓜割で石切始まる	大正初期ブドウ栽培始められる T3　梅津勇太郎氏、粉ミルク製造方法完成、新品好評 T8　日本製乳 KK 設立総会、初代社長大河原万右エ門	T11　高畠軽便鉄道 [糠ノ目 - 高畠] 間開通 T11　屋代川改修工事 T13　高畠 鉄道全通 [糠ノ目 - 二井宿] S9　高畠鉄道、高畠駅舎が石造二階建てに改築、竣工		T 15(昭和元年)　高畠町役場、元郡役所を改築、移転する
昭和	戦後間もない頃、瓜割丁場の石工 40 人と伝えられる S33　高畠の石碑石仏刊行	S11　この年、東置賜郡内製糸工場の生産量が県内の 80%を占める S23　置賜酪農協同組合設立総会 昭和 30 年代においてブドウの生産が最盛期を迎える S38　この年、洋梨の生産がピークを迎える S45 年以降減反政策により果樹復活、加工用であった洋梨が生食用になる S58　生食用の洋梨大生産地となる	S10　蛭沢湖着工 (S23 年竣工) S39　浜田ひろすけ童話碑、鳩峰にたつ S43　山交高畠線 [高畠 - 二井宿] 間廃線 S49　山交高畠線全面廃止、バスへと移行 S51　安久津、二井宿地区に国道 113 号線開通 S54　ブドウ・マツタケライン全通	S15　日本製乳 KK 全焼 S39　新潟地震により甚大な被害を受ける S40　二井宿中部落にて大火、13 棟全焼 S42　羽越水害による被害甚大 S43　安久津大火、10 棟全焼	S29　高畠町、二井宿村ほか三村と合併、社郷町が成立 S30　社郷町、名称を高畠町へと変更
平成	H22　後藤初雄さんの引退により、手掘りでの石切りが終了 H23　高畠まちあるき調査開始 H25　第 1 回高畠石工サミット開催				

(髙橋作成)



昭和 23 年 10 月 13 日撮影
山形交通高畠線の線路が確認できる。瓜割丁場の北に白くみえるのは、開墾中のぶどう畑。戦後ここから間知石が採られた。

国土地理院所蔵　USA-M633-26



昭和 38 年 6 月 2 日撮影
瓜割丁場の南、駄子町駅に鉄道で運ぶための石置き場がみえる。屋代川周辺（左端）に家が増え、道路と線路が平衡して走っている。藤松山で石切りが盛んになっている。

国土地理院所蔵　MTO635X-C6-13



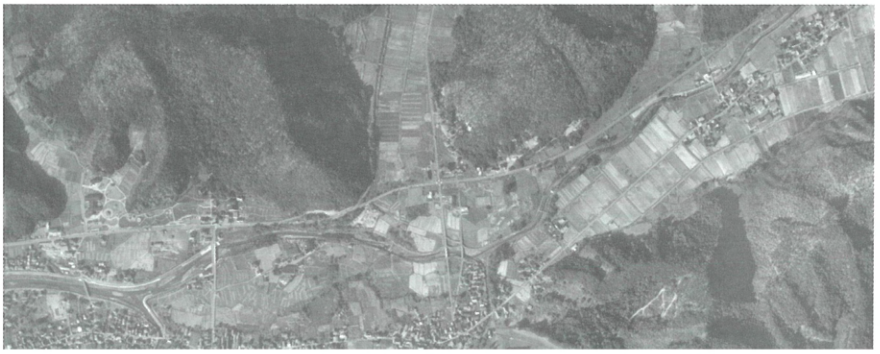
昭和 45 年 5 月 24 日撮影
沢福等の削りが大きくなる。二井宿ー高畠間の線路が廃線に。駄子町（蛭沢駅）前の線路が消える。

国土地理院所蔵　MTO704X-C7-13



昭和 58 年 5 月 3 日撮影
ぶどう・まつたけラインが開通している。山形交通高畠線全面廃止のため、線路が消え、道路（国道 113 号線）が新しくなる。瓜割丁場の南東で間知石を採った所が白くみえる。

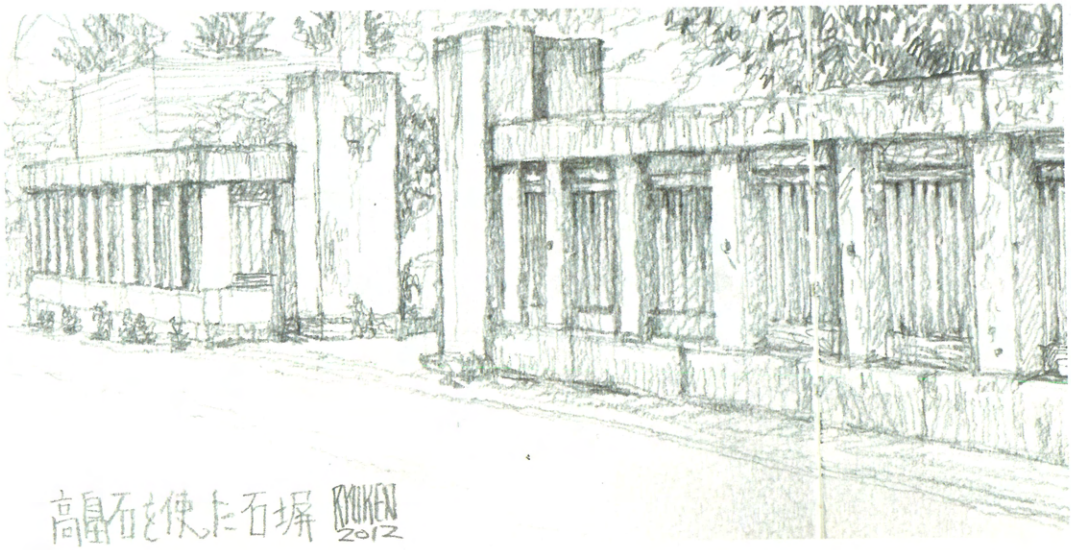
国土地理院所蔵　TO833X-C12-12



平成 11 年 10 月 29 日撮影
瓜割丁場に木々が茂り、採石が衰退しているのが分かる。地図左下部分に民家が増加したのが確認できる。

国土地理院所蔵　TO995X-C1-12
（瀧口作成）

第二章　町並みのむかしといま



二井宿街道の町並みと村の暮らし

鉄道の敷設と廃線、113 号線開通

安久津・二井宿地区は三方を山が取り囲み、中央に屋代川が流れる東西に細長い盆地状の地形を呈しています。丘陵部には凝灰岩の岩塊が露出しており、比較的集落に近いことからたくさんの石切り場が設けられました。川の南岸には宮城県白石市に抜ける二井宿街道（仙台街道）が通り、切り出された石は馬車やトラックによりこの道を運ばれました。北岸の山麓は水田地帯で、その中を大正 13 年に延伸した鉄道が走っていました。廃線後はその跡地に国道 113 号が開通し（昭和 51 年）、以後二井宿街道に代わって主要な交通路となりました。

二井宿街道の村々の変遷

ここは内陸と太平洋側を結ぶ奥羽山脈越えルートの一つであり、7 世紀には古代置賜郡の最初の政治・経済・宗教センターが置かれました。平安末～鎌倉期には安久津八幡宮が成立し、各時代に為政者や村落在家の信仰を集めてきました。「鳥居町」の名は八幡宮に由来するといわれます。近世には二井宿街道が参勤大名らの通る羽州街道の支路（七ヶ宿町干蒲で分岐）となり、たくさんの人や物が往来しました。陣屋（高畑城）があった高畑村には城下町が形成され、商品経済の発達とともに、置賜からは米・青苧・酒・織物が出ていき、陸奥からは魚類が入ってきました。二井宿には一時（米沢藩政下）番所が置かれたこともあり、宿駅の町としてあったようです。安久津村の東側にある「駄子町」は、由来は定かでないものの、その名称から荷駄等の運送に関わる人々が住んでいたことがうかがえます。

街道筋に形成された集落は、屋代郷の安久津村、新宿（後に二井宿）村と呼ばれ、安久津は明治 22 年の町村制以降高畑村大字安久津、二井宿は昭和 29 年の合併で社郷町（翌年高畠町）大字二井宿となりました。江戸初期に編纂された米沢藩の『邑鑑』によれば、安久津村が 45 軒－196 人、新宿村が 83 軒－356 人、幕末の



航空写真（昭和 51 年）にみる二井宿街道の町並み　（国土地理院所蔵）
屋代川流域の氾濫原に水田が集中、丘陵斜面には石切り場や果樹園がみえる。



明治 20 年代の宅地の分布
街道に沿って 4 つの集落が形成されている

文久３年(1863)にはそれぞれ133軒－670人、277 軒－1115 人（「郡中村々家数人別改」）とみえます。今回調査したのは二井宿街道に面した安久津・二井宿村の一部にあたります。

まず街道筋の変遷を航空写真や地籍図からたどってみましょう。



鳥居町の町並み　昭和 51 年　短冊形地割に南北方向の家屋を配置

明治期の集落

左下の地図は「土地台帳」をもとに明治 20 年代の宅地の位置を示したものです。間口に対して奥行きの長い短冊状の宅地が道路の両側に並んでおり「路村」の形態をとっています。集落は高畠・元町に続く「入水」地区と図に示した「南浦･清水前､北浦」「南河原･町浦､鳥居町」「山居前、駄子町・中屋敷」「大畑」の４箇所にみられます。山居前と大畑は大字二井宿、それ以外は大字安久津になります。4 つの集落は現在の安久津町、鳥居町、駄子町、上駄子町に対応します。明治 11 年（1878）に安久津村が 114 戸、762 人、二井宿村が 227 戸、1,115 人と記録されています。その後、街道筋が徐々に宅地で埋まっていく様子が航空写真（６頁）でみることができます。

宅地の建物配置

古い民家では母屋が街道に直交して建つ例が多くみられます。間口の広い宅地では道路に並行する例もあります。屋根は寄棟と入母屋が目立ちます。大棟に煙出しを持つ茅葺き屋根はほとんどなくなりましたが、トタンで覆われた状態の家屋はまだ見ることができます。宅地の前面には家財道具等を入れる土蔵を置き、背面や側面には農機具等の倉庫、酪農に伴う堆肥場やサイロなどがありました。中小の農家で飼われていた１～数頭の牛は玄関の土間周辺に置いたといいます。有力者の家には石塀があり、入口に門柱があって玄関まで舗石が敷かれていました。



門から主屋の玄関に至る長い敷石
昭和 37 年頃撮影（島津大吾氏提供）

どの家にも入口や母屋からよく見える位置に庭が設けられ、土留めや庭石として置かれたたくさんの高畠石を見ることができます。母屋の奥には広い土地があり菜園等に利用されています。ブドウを栽培する家も少なくありません。

「飲む水」と「使う水」

屋代川には南から上有無川、下有無川が合流し、両河川に挟まれた扇状地上は畑地として利用されてきました。街道筋は伏流する地下水が豊富で、各家庭では井戸が掘られたほか、自噴する清水を飲料水として利用しました。洗い水は上有無川や谷水を集落に引き込み、宅地内を横断しながらリレー式に隣家に伝える入川樋水路網が整備されました。また、この水を使い道路脇に角石等を積んだ防火用の水溜も作られま



安久津の町並み　昭和 42 年羽越水害
入母屋造の民家が並ぶ。右手に今もある屋敷明神が見える



道路側溝に連結する防火用水　入川樋システムを利用して設置（鳥居町）

した。

洪水との戦いだった水田経営

水田はおもに屋代川に近い低地（谷底平野）と安久津集落南の後背湿地で営まれました。3つの支流が合流する駄子町～安久津八幡宮付近は、宝暦 7 年（1757）の大洪水をはじめたびたび水害にさらされてきたところです。幕領期に行われた元禄 4 年（1691）の検地では、新宿村は村高が大きい「上々」に格付けされていますが、「下田」以下の収量の低い田の割合が半数以上を占めていました。「砂田・砂畑」「山田・山畑」「川原田・川原畑」も他の地区より多くなっています。江戸初期において田にかかる税率は安久津が 4 割に対して新宿は 2 割 3 分と低く設定されています。これは洪水や冷害の影響を受けやすい不安定な田を多く含んでいたせいともいわれています。

戦後の石切り場の発展と衰退

丘陵部は昭和 20 年代まで薪炭林や植林地として開発され、特に二井宿では林業や製炭業が盛んでした。幕末に大笹生から屋代川北岸に拡大した石切り場は味噌根や羽山（高畠）、沢福等、瓜割、西沢等、集落単位に開発が進んだものとみられます。航空写真からは戦後になって瓜割山周辺や沢福等山、藤松山など、角石・間知石の石切りが徐々に拡大していったことが分かります。同時に斜面のぶどう畑の開墾も進んでいきました。瓜割山石切組合の控え帳（引地兼二氏蔵）によれば、山主に山代を支払う石工数は昭和 29 年が 23 人（親子で稼ぐ人もあり実数は約 30 人）、昭和 45 年が 18 人、昭和 49 年が 7 人、昭和 50 年が 6 人となっており、昭和 40 年代後半に急激に減ったことがわかります。昭和 50 年代後半に石切り場が徐々に緑を回復していく様子は航空写真（6 頁）にも表われています。

大規模な石材生産地では石切りが過剰な森林伐採や土砂の流出による山野の環境破壊を伴う例があるなかで、高畠でそのような事例は聞き及びません。経営規模が小さかったという側面もありますが、職人たちは節度を持って資源利用にあたっていたものと思われます。

石工の信仰

瓜割山の石工たちは麓の栗の木の枝に幣を下げ、根元に小さな石祠をおいて山ノ神を祀りました（15 頁写真）。山ノ神講は旧暦 10 月 17 日（その後 11 月 17 日）に丁場の祠にお参りし、直会は石工が輪番で「宿」を提供しました。27 名が参加した昭和 29 年の瓜割山の山ノ神講では折詰のほか、清酒 10 本、肉、刺身、汁物、菓子等の献立がみられます。石工たちは山の自然に感謝するとともに、仕事の安全と家業の繁栄を祈りました。宴会では仲間との友愛、結束を固めていきました。

環境に合わせた資源分散利用型の暮らし

安久津・二井宿は近世以降、山林と河川流域を生産の舞台とし、国境に通じる街道筋、都市近郊という社会環境の中で、水田稲作と林業、畑作、養蚕、酪農、果樹などを組み合わせた複合的な農業地帯を形成してきたのです。

広い平野と安定した灌漑施設に恵まれ、水田稲作一辺倒の集約的な農業を志向した地域とは異なり、ここでは周囲の多様性を持つ自然環境とその資源を有効に使い、災害と折合いをつけながらリスクを分散して暮らす生活の知恵が息づいてきたのかもしれません。

高畠石の生産と石材利用もこのような環境の中で展開していきました。次章以降、その具体的な姿を見ていきたいと思います。（北野）



洪水対策で積まれた石塁（駄子町）



石切りによって荒れた羽山（『東置賜郡史下巻』より）



第三章 石切り・石工の技術

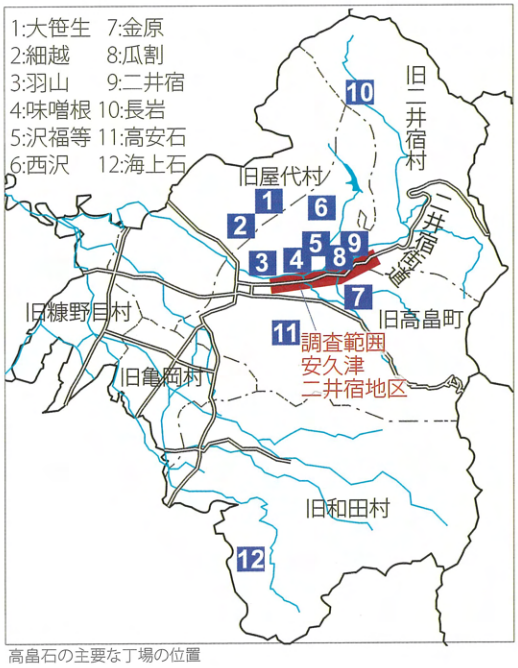
採掘の歴史

小さな丁場が無数に点在する高畠石

高畠石は、採掘場所名を冠して名づけられた石の総称で、一般的に丁場ごとの地名の名前を用いて大笹生石や沢福等石などと呼ばれます。その代表的なものとして下図に示す 12 カ所が挙げられます。最も大きな大笹生丁場では、明治 43 ～ 45 年の調査によると規模は 4 丁歩で、年間採掘量も 6,000 才（167 ㎥）ほどとされ、同じ凝灰岩の大谷石が 70 町歩、5,000,000 才と比べると小さな丁場であったことがうかがえます。加えて、民家の敷地内や畑に個人所有の石切り場が数多くみられることも特徴で、小規模の丁場が無数に存在したといえます。

最初に採掘が開始された大笹生丁場

このうち、記録や聞き取りにより詳細が判明する大笹生・沢福等・瓜割の丁場の歴史を振り返ってみたいと思います。大笹生丁場は、最も早期に採掘を開始した丁場とされます。文化 3 年（1806）に建築された工藤家主屋の基礎石に同地で採掘された「一二八」の角石が使用されていることから、遅くとも江戸後期には石工による採掘が行われたと考えられます。石工の名前が分かる最古の記録を示すものとして大笹生地区内に存在する石番小屋があります。小屋の柱に嘉永 5 年の銘があり、その壁面には「石細工　九良右エ門　忠右エ門　庄次郎　七兵エ　文蔵　四朗兵エ」の 6 人の石工の名が刻まれています。九良右エ門は石切りのほか、鍛冶屋・馬方・取引先との交渉をまとめた総元締であったといいます。その後、明治 3 年には石工 21 人以上、明治 43 ～ 45 年には石工 50 人・人夫 70 人、大正 8 年には石工 31 人以上が働いたとされ、明治～大正期にかけて良質な石が出たため最も賑わいました。しかし、採りつくして石が出なくなったため昭和中頃には終了し、その際石工の多くは、味噌根丁場へ移ったとされ、大笹生の石切り技術が山を越えて伝えられました。



高畠石の主要な丁場の位置


大笹生丁場　溝切り痕がみえる


大笹生丁場に残る鍛冶小屋の基礎

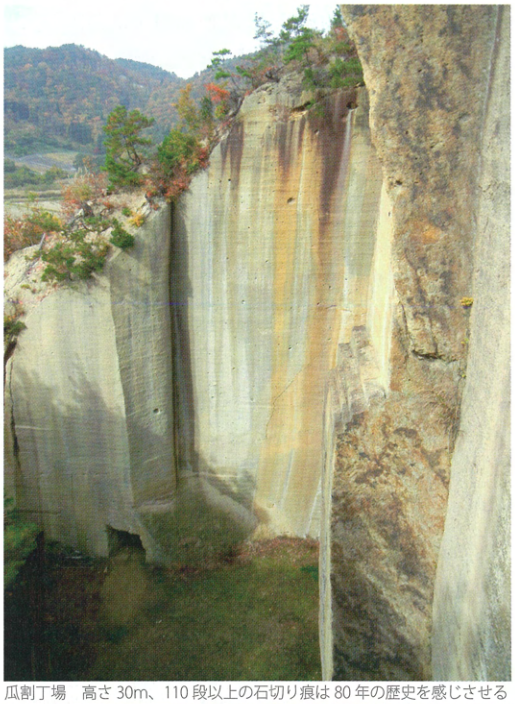

嘉永 5 年建造の石番小屋


石番小屋には石工の銘が刻まれる


沢福等丁場　良質な石材が採掘された

偶然発見された沢福等丁場

一方沢福等丁場は、大笹生出身でそこで採掘技術を学んだ栄吉さんが安久津鳥居町の島津家に婿入りしたことがきっかけで採掘が始まりました。慶応元年に栄吉さんが自身の山に焚き木を取りに行った際、大きな石がゴロゴロしているのをみて豊富に石が採れることが判明し、一人で石切りを始めたとされます。その後栄吉さんは、6人の弟子を抱えて技術を伝承し、昭和初期に最盛期を迎えましたが、後述する瓜割丁場の採掘開始によって石工が移動して減少し、角石の採掘は昭和 50 年頃、間知石の採掘は平成 19 年で終了しました。



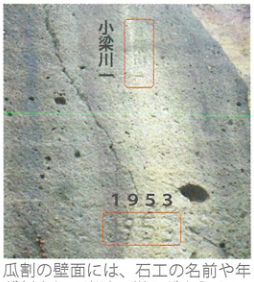
瓜割丁場　高さ 30m、110 段以上の石切り痕は 80 年の歴史を感じさせる



瓜割丁場の採掘風景（平成 21 年撮影）



機械切りで採掘された瓜割の洞窟



瓜割の壁面には、石工の名前や年が刻まれ、当時の様子が窺える

最後に開かれた瓜割 丁場

瓜割丁場は、沢福等の石工星善作氏が大正 12 年に瓜割に移動して採掘が開始されました。終戦後には帰還兵がすぐに仕事に就ける石切りを行ったことで最多の 40 人程が従事しましたが、昭和 45 年は 18 人、昭和 50 年には 6 人まで減少し、平成 22 年に石工後藤初雄さんの引退により 150 年以上続いた職人の手掘りによる高畠石の採掘が終了しました。

採掘方法と流通

「ワッカケドリ」と「ホッキリ」

石材の採掘方法は、「ワッカケドリ」と呼ばれる露出した岩塊から切り取る方法と、「ホッキリ」や「ダテボリ」と呼ばれるツル（鶴嘴）による溝掘り技法を使った露天掘りの 2 種があり、共に石工の手作業で切り出されます。前者は間知石や基礎石などに使われる小型の角石で古くから用いられた技法です。一方後者は、高畠石で定尺とされる「一二八（いちにいはち）」と呼ばれる 1 尺 2 寸 ×8 寸 ×6 尺の角石を採掘し、明治期以降用いられました。ただし「一二八」は、その名の通り石材の断面の大きさを示す言葉であるこ



角石を採る「ホッキリ」 ツルを振り下ろして溝を掘る

とから、当初は様々な長さで採掘されました。大正８年の『役石取立帳』（工藤氏所蔵、大笹生）には、採掘者の名前の他、「六尺五寸　一二八」や「壱丈四尺四寸　一二八」のように石の長さがそれぞれ明記されています。現在採掘される「一二八」は、瓜割丁場でみられる石の盤を作り規格にそって掘り進められたもので、新しい技法であったといえます。

高畠石の定尺「一二八」

一般的に石材は受注生産とされましたが、基本は「一二八」を用い、それを現場で組み合わせて施工しました。この定尺は、同じ凝灰岩産地である大谷石の「五十（ごっとう）」（3 尺 ×10 寸 ×5 寸）や房州石の「尺三（しゃくさん）」（2.7 尺 ×9.5 尺 ×8.5 尺）より大きく、この規格は現代まで踏襲されました。また瓜割・沢福等・西沢では一部機械掘りによる採掘が行われ、瓜割は昭和 49 年から県外業者により開始されましたが、石材の中に含まれる硬いカナイシにより刃がかけるため、その修理代と合わせると利益が少なかったことから、僅か数年ほどで休止し、現代まで石工の手掘りが継続されました。


矢を入れた跡


高畠石の定尺「一二八」 1 本の重さは 300 kg以上


護岸などに使われる間知石


端材を敷き詰めた石落とし道


楢の木で作った簡易的なソリで運ぶ

切った石を運びだす「山出し」

切り出した石材は、クヌギの木を針金で梯子状に結わえ付けた簡易的な「土ぞり」に乗せて運び出し、採掘した際に出る屑石などの端材を敷き詰めて廃油を塗った「石落とし道」を使って搬出しました。しかしこの土ぞりは、平らな面ではとても運び出せるものではなく、大八車に載せ替えて運んだそうです。大笹生では、運搬を専門に行う人足を「鬼平（おにへい）」と呼び、屈強な男達が担いました。山出しされた石材は一時的に集石場に積み上げられ、そこで石の大きさや数の計量が行われました。

鉄道によって運び出された高畠石

石置き場からは、大八車や馬車で注文者や石屋まで運び、遠方へは舟を用いて運送しました。沢福等では大正 13 年に高畠軽便鉄道の開通に伴い、石置き場から駄子町駅まで引き込み線を引き、トロッコで石材を運搬しました。このため高畠石の流通は、高畠町や隣接する米沢市・赤湯町など、鉄道や舟で運搬が可能な置賜地方に限られ、全国で使われた大谷石とは異なる地産地消の石であったといえます。


蛭沢駅の周りに積まれた間知石（『企画展山形交通高畠線』平成６年）

石工の仕事

専業石工と兼業石工

高畠石の石工は、専業と兼業に分けられます。石工は兼業が殆どで、沢福等の島津さんは農閑期に採掘し、瓜割の後藤さんも当初は冬のみで、後に専業の石工に転職するなど、冬季の農間仕事として従事されてきました。

「イシトリ」「イシコウ」「イシキリ」

また石工は、山から間知石などを切り出す「ヤマダシ」「イシトリ」、角石を門柱や鳥居などに加工する「イシコウ」、良好な岩脈石層を発見して角石を採石する「イシキリ」に分かれます。ヤマダシやイシトリは比較的技術が容易なことから兼業の石工が多い一方、修行を必要とするイシキリは専業で行う方が多かったそうです。

この専業と兼業の石工がそれぞれ異なる採掘により分業する点は、大谷石や房州石の丁場ではみられない特徴です。これは小規模の丁場が各地に点在したため、農業との兼業が可能であり、仕事の難度に合わせた採掘方法が確立していたことが理由と考えられます。石切りは男仕事として行われますが、屑石の撤去や石を起こす際の補助などは女性や子供が手伝うなど、家族総出で行うこともありました。

様々な仕事を行う石工

「イシコウ」「イシキリ」など角石を切り出す石工は、一般に 5 年～ 10 年の修行が必要とされました。また石工は、大正期までは基本的に注文・請負・運搬・施工を一人で行い、採掘に用いるツルの修繕など鍛冶仕事も行うなど、仕事は多岐に渡りました。採掘は、丁場の土地所有者に採掘料を支払って行いますが、その場所は先着順で決定しました。ただし、石の価格や馬車引きとの仲介などは丁場ごとに組合を作って取り決め、毎年 11 月 17 日に丁場の石工が総出で「山の神」を祀るなど、石工同士の繋がりもみられました。

職人の手掘りを継続したこと

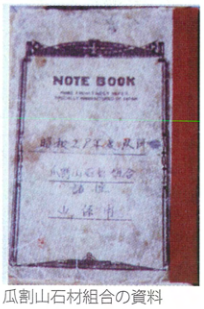
以上のように高畠石は、遅くとも江戸後期から農間仕事の一つとして採掘されました。丁場は、年代が下っても機械化による企業的な生産体系に移行せず、個人経営の石工が組合や講による共同体を築いて手掘りの生産を継続しました。そのため採掘量は少なく、流通路も限られたことから、主に地域内で消費されたといえます。



石工は毎日鍛冶仕事を行う（平成 21 年撮影）



現在も残る鍛冶小屋



瓜割山石材組合の資料



11 月 17 日に石工総出で山の神を祀る（引地兼二氏提供、平成元年撮影）

様々な石の特性



「バクハ」
粘土が溜まることでき、水が浸み込むと膨張して割れるので必ず掘り出しておく。



「カナイシ」
固い石の混入物。機械切りで利用するダイヤモンドカッターが痛むほど。採掘には天敵。



「クサレ」
軽石が入っているのが特徴。内部に層のような状態で混入。

先駆者を顕彰した石材記念碑

安久津町 2463 に所在。良材を産出する沢福等丁場を開いた島津次郎兵衛氏と販路拡大に貢献した石問屋の遠藤友之助氏を顕彰した記念碑。明治 44 年 11 月に弟子たちが発起人となって建立。

沢福等丁場開拓と販路拡大に貢献

石碑は自然石（200×145× 高 55cm）の上部を削り込んで方形の台石（99×76.5× 高 38cm）を置き、その上に截頭角柱形（61×49× 高 154cm）の石柱を立てています。石碑は南面し、石柱正面に「石材記念碑　金内五七書」、東面に「明治四十四年十一月」、西面上段に 4 行で「慶應元年氏開始　切石於澤福等山　慶應元年氏知石　材良好拡張販路」、下段には「島津次郎兵衛　遠藤友之助」と刻まれます。数年後に門柱と隅柱をもつ外柵が設置されました。入口には木の扉があったそうです。

敷地は集落はずれの畑地を整地し、前年に関係者 86 名で分筆登記されました。当時は今よりも地面が低く、石碑の前面に舗石がありました。現在、周囲は住宅地となり、西側には地蔵堂（釜場地蔵尊）が建っています。

石工と石屋とその弟子達

紋付き袴等の正装で写るのは前列右から高梨豊吉（弟子）、小梁川倉次（弟子）、島津次郎兵衛、遠藤友之助、佐藤新三郎（弟子）、大地勘七（弟子）、後列右から山口寅次（弟子）、安藤新之助（弟子）、金内五七（題字：高畠小）、大河原廣吉（高畠小）の 10 名です。

石柱の背面には最上部に「鳥居町　発起人」とあり、以下 4 段に渡って 34 人の名前が刻まれています。3、4 段目には金原や二井宿在住者も含まれます。台座北面には島津家と遠藤家の家紋、東面から北面、西面にかけてはさらに 24 名の名前が刻まれます。ここでは高畠、入生田、高安、深沼、一本柳など現高畠町内の字名のほか「長井」がみえます。石柱には発起人を含む鳥居町・安久津等の石工、台石には石屋・山主等の関係者の名が刻まれているようです。

59 名の方が寄付

また古写真では左奥に芳名板（明治 44 年 12 月 10 日付）が掲げられており、ここには建碑にあたって寄付をした人の氏名と発起人 9 名（安藤新之助・小梁川倉次・大地勘七・高梨豊吉・佐藤新三郎・山口寅治・我妻建作・小野政吉・佐藤長吉）、あわせて 59 名（他に 2 名追記）の名が連なります。発起人の前 6 名が古写真に写る弟子たちです。石碑背面 2 段名にはこの 9 名と写真に写る大河原廣吉の名がみえます。

高畠石の歴史を辿るランドマーク

石碑や芳名板には多数の石工および関係者の名前が見え、明治末年には鳥居町や安久津で石材採掘・販売が重要な生業の一つになっていたことが分かります。また石工や地域の人々がその功労者に感謝の念を抱き、このような記念碑を遺したことは誇るべきことです。この石碑は明治末の高畠石生産の実態を知りうる貴重な文化遺産であり、高畠石の歴史を辿るランドマークとしてこれからも活用されることでしょう。

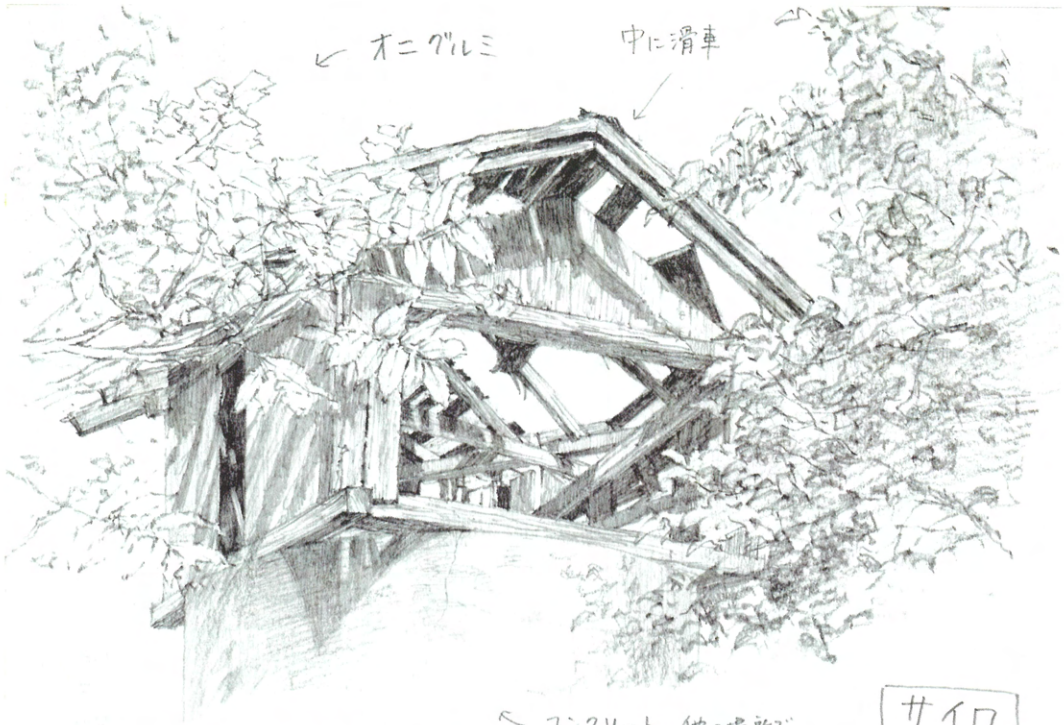
解説板を設置

まちあるきプロジェクトにより石材記念碑に再度光が当てられ、これを契機に平成 25 年 3 月、東北芸術工科大学と高畠石の会の協力により、高畠町教育委員会によって現地に石製の解説板が設置されました。（北野）



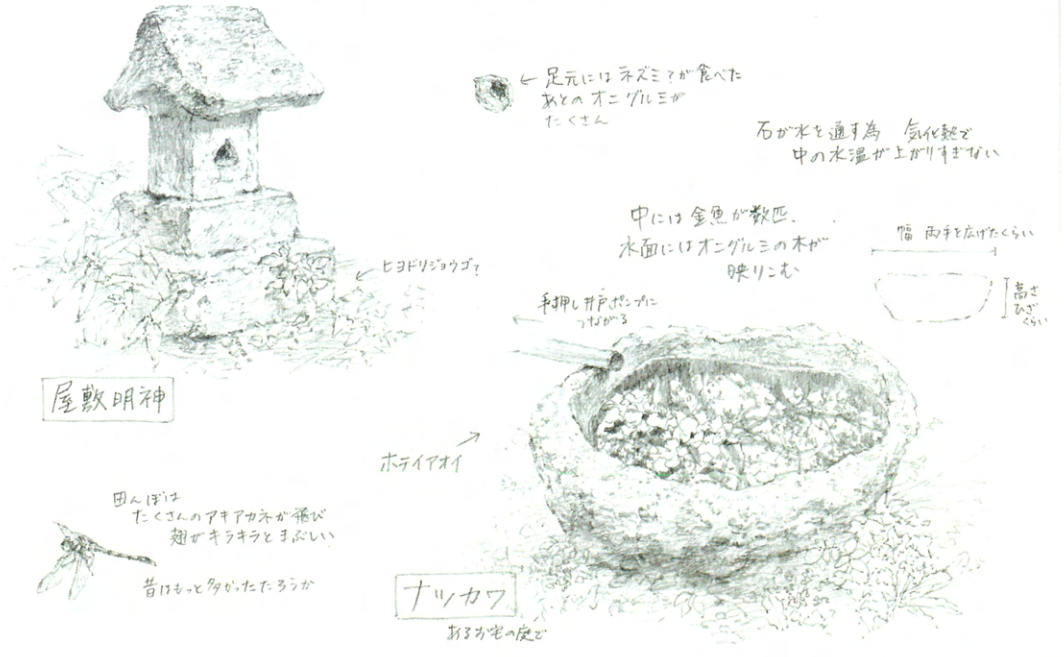
石材記念碑竣工時の古写真（明治 44 年、島津次郎兵衛氏提供）


完成した解説板を前に記念撮影（平成 25 年 5 月　第 15 回まちあるき）



吉

第四章 石とともにある暮らし



まちあるき調査概要

三位一体で行った「高畠まちあるき」

ここでは、平成 23 年から実施してきた「高畠まちあるき」の成果を用い、住宅における石材利用の特徴や町並み景観の形成要因について報告します。「高畠まちあるき」は、二井宿街道の町並みを 1 軒 1 軒訪ねながら、高畠石を使用している遺構や石造物を探し、記録していく作業です。それには、住民の協力と対話が欠かせません。調査部隊として東北芸術工科大学の研究員や学生、それらを繋ぐ懸け橋となったのが地元有志の方々で結成された「高畠石の会」の皆様、調査を円滑に行うためにサポートして下さったのが町教育委員会で、この 3 つの力が結束して実施されたのがまちあるきです。

高畠への想いを胸に調査開始

安久津・二井宿地区の周囲の里山には何箇所も石切り場があり、建築基礎や石塀、敷地境界、側溝、囲炉裏、井戸など、あらゆる場所にふんだんにこの石が使われています。この生活の風景の中に、高畠石とともにあった地域の人々の歴史の営みが重層的に顔を覗かせています。

他の土地ではみることのできない、この「高畠らしい」町並みがいつどのようにして形成され、現在に至るまでどのように変容してきたのかを調べてみたいと思ったことがこの調査の始まりです。そこには、身近な自然資源とうまく付き合っていく暮らしの知恵や限りある資源を持続的に使い続ける精神と技術、自然と共生し地域のつながりを支えてきた信仰などが垣間見えるのではないでしょうか。



伝えたい 高畠石の価値

町内外の研究家ら会設立

石切り場踏査や文化財再発見へ

高畠町内で採れる凝灰岩「高畠石」の文化的価値に光を当てようと、町内の歴史愛好家や県内の歴史研究家らが「高畠石の会」を設立した。調査や学習会を通じ、高畠石が育んできた地域固有の歴史、文化、景観を掘り起こし、次代に継承していく。

同町にある宝積院跡の横穴墓には使われるなど、古来最も石切り場があった「高畠一帯」と密接に関わりを持ってきた。安久津にある旧高畠駅の駅舎のほか、家々の石垣、石塀、石造物などにも多く使われている。

石切り場は区割石の庭園として整備され、今でも石切り作業が行われている。

これまで体系的な調査は行われてこなかったが、2009年、「高畠石の地域文化遺産としての重要性を考える講演会を、東北芸術工科大歴史遺産科の北野博司准教授らを講師に町内で開催。ことしから同大文化財保存修復研究センターによる調査も始まったことから、高畠石が脚光を浴びた地域固有の歴史や文化を学ぼうとの機運が町内関係者の間で高まった。

設立総会は先月25日夕、町総合交流プラザで開かれ、町内の高畠石や歴史の愛好家ら17人が出席。▽石切り場の踏査と伝統文化の実態調査▽石の文化財の再発見―などを主な事業に据えた規約を決め、会長に地元「うきたむ考古の会」の伊沢良治さんを選んだ。アドバイザーとして北野准教授、吉田敦彦立米沢女子短大教授、佐藤鎮雄県立うきたむ風土記の丘考古資料館館長らが参加している。伊沢会長は「高畠石は私たちの生活にあまりに自然に溶け込んでいて、あまり意識しないのが現状。この機会にあらためて価値を見直し、まちづくりのヒントにしていきたい」と会長展の決意を語っていた。

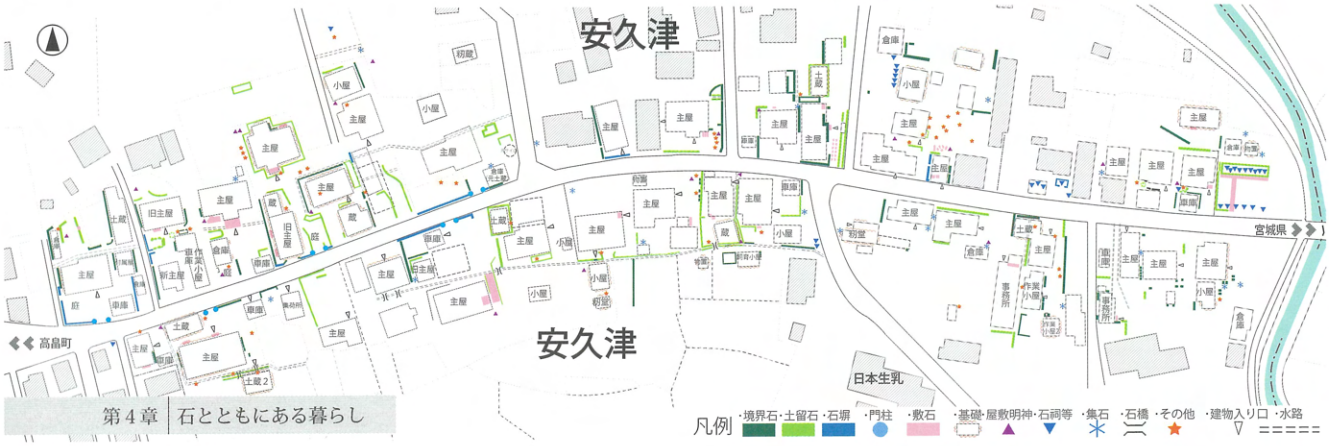
高畠石の会結成
平成 23 年 4 月 25 日に設立総会が開かれ、「高畠石の会」が結成されました。これを機にまちあるき調査は始まり、現在まで計 31 日間実施されました。
山形新聞　平成 23 年 5 月 17 日号より



平成 23 年 6 月 19 日に第 1 回高畠まちあるき―町並み編が開催



調査終了後は各班の成果を持ち寄って報告



車で素通りしていた町並みも、ゆっり歩きすれ違った人と話しをしながらいくと、全く違った風景が浮かび上がります。そんな経験はないわけではありませんが、数年前からここを歩く度にその想いが強くなりました。

そんな想いに共感してくれた地元の人たちが自然と集まり、平成 22 年に準備会を立ち上げ、翌年 5 月に「高畠石の会」が正式に発足しました。自分たちの住む土地の「記憶」と「らしさ」を自らの手で調べていく。石をみる眼差しには、いろいろな「目」があると面白い。地元の人、よそ者。若者、青壮年、お年寄りが入り混じって。この活動の背景には「自然と人との関わり」がテーマにあります。現場での出会いと交流を通して、住む土地の未来や生き方のヒントをみつけていければという想いと共に始まりました。


基礎石が耕運機の土台へ変貌


作図に苦労するイリガド


グループで撮影、測量、作図


他地域の凝灰岩を求めて富津市へ


1 石の大きさを計測


休むには丁度良い高さの「一二八」

調査の目的と方法

本調査では、地域独自の文化遺産である「高畠石」の存在とその価値を住民自らが再発見し、認識することで、地域文化への愛着とこれを新たなアイデンティティとして醸成し、未来の町づくりに活かすことを狙いとして行いました。出来る限り住民と対話しながら調査を行えるよう、一軒ずつ一つひとつの石の利用方法を地図に作図して、写真撮影を行いながら家主にその利用法や年代、経緯などを丹念に聞き取る方法で行いました。調査をして、初めて自身の家に高畠石が多く利用されていると気付いた方もいるのではないでしょうか。学生や地元の方が容易に調査が出来るよう調査シートを作成してマニュアル化し、体系的に高畠石の利用が把握できるように努めました。調査に訪れた家の方たちの中で、高畠石に少しでも多くの方が興味や関心を持つきっかっけとなればという願いを持って調査に望みました。

総距離数 3.4 ㎞、172 戸を調査

「高畠まちあるき一町並み編」は、これまで 14 回 20 日、延べ 238 人の調査参加者の協力を得て、安久津～二井宿地区の二井宿街道沿いに面する 172 戸の住宅を対象に調査を実施しました。調査した距離は 3.4 ㎞にもおよびます。ここからは、その調査成果を基に石の種類・数・利用分布についてみていきたいと思います。


調査前にこれまでの調査成果を説明（平成 23 年撮影）



55種類と多様に利用された高畠石

まず右表に掲載した石の種類をみると、55種確認でき、多様な方法で石が利用されたといえます。その数をみると、2,962ヶ所あり、膨大な石材が外構に用いられたといえます。以下、石材利用数上位5種の特徴をみていきます。

第1位　土留め石　701ヶ所

本調査で定義する「土留め石」は、石の側面に 1/3 以上盛り土するものとし、植栽や畑の区切りとして利用されます。また、水路や護岸用の土留めとしても利用され、最も多い701ヶ所で用いられます。基本的に「一二八」などの角石を用いますが、水路や護岸では間知石を用いる場合もあり、後述する同地区の景観の特徴である敷地の前面や背面に縫うように流れる水路には、欠かせない利用方法といえます。

第2位　境界石　636ヶ所

地表面に石を置いて区切りとして利用するものが「境界石」で、一般的に敷地や建物との間に配置されます。土留めに次ぐ 636ヶ所で利用され、建物の壁際に石を配置する「犬走り」や軒の下に配置する「雨落ち」、植木鉢など石の上に置く「台石」など複数の用途で利用されており、主に角石が用いられます。大きな「一二八」を敷地周囲に1～2段に積み重ねる姿は、高畠町ならではの景観であり、視線を遮る石塀とは異なる独特の風景がみられます。

第3位　基礎石　351ヶ所

主屋や土蔵、小屋など新しい建物以外の殆どの建物で使用されているのが高畠石の「基礎石」です。基礎石は、家屋を支える役目を持ち、平成 23 年の東日本大震災においても崩れることなく何十年と支えてきました。基礎石は柱の下に石を配置する「礎石」と切石を敷いてその上に土台を据える「切石基礎」の2種が用いられ、高畠では簡易的な小屋を除いて切石基礎が用いられます。特に立派な土蔵では、基礎石に家紋や額縁などの加工を施した例などもみられ、意匠性に富んだ基礎石がみられます。

種類	数	種類	数
土留め石	701	肥塚・堆肥置場	26
境界石	636	入り口	24
基礎石	351	腰壁	21
集石	197	旗竿石	19
敷石	172	蓋石	19
庭石	78	井戸側	17
石塀	77	重し	14
屋敷明神	68	束石	14
石碑	67	立石	11
ナツカワ・手水鉢	59	サイロ	9
階段	57	石樋	8
石臼	43	台座・基壇	6
門柱	41	石蔵	4
石橋	39	牛はなし石	2
石炉・炉縁・火鉢	37	石鳥居	2
靴脱ぎ石・上り石	36	その他	49
石灯籠	27	不明	31
		合計	2962

安久津・二井宿地区の石材件数

第4位　集石　197ヶ所

高畠町の至る所でみられるが石を貯めて置く「集石」です。敷地の中で角石が整然と積みあげられたもの、向きは同一だけど長さや太さがバラバラに置いたもの、置いたのか放って置いたのかさえわからないもの、色々な形で貯めています。これらの集石は、基礎石や石塀など既存の石造物を解体した際に、今後再利用することを目的に保管されています。石を大事にし、再利用する高畠ならではの石の文化が集石の数の多さに表れているといえます。



第５位　敷石

敷石は、主屋の玄関前などに石を敷き詰めて舗装したもので、172 ヶ所で用いられています。敷地入口から建物へ繋がる石のアプローチは、コンクリートなどでは表せない独特の景観といえ、高畠らしさ一つではないでしょうか。石の厚さは 12 ㎝ほどで、坪単価で石屋が施工し、新築の建物でも玄関ポーチの敷石に利用されるなど、現代においても新たに施工されます。

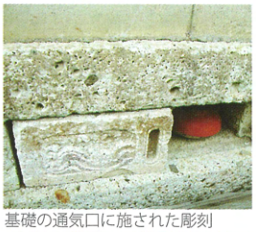

敷地を通る水路とその土留石


庭の植栽などに利用される土留石


敷地に沿って配置する境界石


空積みされた角石は独特の風景


額縁が彫られた基礎石


基礎の通気口に施された彫刻


玄関アプローチに用いられる敷石


新築時に購入した敷石

利用頻度でみる石材利用の傾向

次に、高畠石がどのくらい使用され、どの使い方が最も多いのか、家ごとの石の利用頻度に注目してみていきます。高畠石の利用は、用法により 12 種に分類でき、各戸での利用頻度を集計すると下の表の通りです。種類別に傾向をみると高畠石の利用の特徴がみえてきます。

典型的な利用－土留石・境界石・基礎石・敷石

この 4 種は、先述の通り利用数が多い石で、各戸における採用率をみると土留石が 87％、境界石が 83％で極めて高いのが特徴です。また階段・敷石は 68％、建物の基礎石は 64％で、この 4 種が高畠石の典型的な利用方法といえます。これらの石材は角石が基本で、特に上位 2 種は高畠石の定尺である「一二八」を加工せずそのまま用います。

年代で異なる石の利用実態

これらの利用がいつ行われたのか、正確な年代がわからないため、各家の土地がいつ購入され、いつ転入したのかが判明する土地台帳を用いて年代傾向をみていくと、法律の改正が石材利用に影響していることが判明しました。

まず基礎石をみると戦後に購入・転入した家では採用が 45％と低いことが特筆され、これは昭和 46 年の建築基準法改正以降、基礎石が鉄筋コンクリートに転じたため利用されなくなったといえます。ただし、戦前期の土地購入・

	土留石	境界石	階段・敷石	基礎石	生活用品類	集石	庭石類	信仰類	門柱・石塀	建物類	生業類	その他	戸数(戸)	平均利用種類数(種)
明治期以前	91	93	74	76	68	63	62	51	38	30	27	18	82	6.9
大正～戦前期	100	78	89	78	56	56	44	56	33	22	22	22	9	6.6
戦後	78	69	56	45	35	35	38	27	15	13	7	11	55	4.3
合計	87	83	68	64	55	52	52	42	29	23	19	16	146	5.9
石工	91	88	76	76	61	64	67	45	24	30	27	12	33	6.6
その他	86	81	66	61	53	49	48	42	30	21	17	17	113	5.7



移動に限れば採用率は 76％と高く、法改定以前はほぼ全ての建物で利用された可能性が高いといえます。一方、土留石や境界石、階段・敷石は年代に関わらず利用率が高く、法改定後も外構では継続したといえます。

暮らしと共に利用－生活用品類・庭石類・集石

一方、旗竿石や石炉などの生活用品類とナツカワや灯籠など庭石類は、過半数をこえる家で採用され、屋敷明神などの信仰類も 42％みられます。したがって高畠石は、生活や信仰など人々の暮らしと共に利用され続けたといえます。また、敷地内に石を備蓄する集石も半数でみられ、それらの石は主に角石で、取り壊した建物の基礎石が用いられます。近隣の不要な石や取り壊した石橋の石を持ち込んだ例もあり、家の中で石を備蓄する慣習が特筆されます。

数少ない利用－門柱・石塀・建物類

家ごとの石材利用で最も特徴的なことは、石の町でありながら門柱･石塀が 29％、石蔵などの建物類が 23％と低いことです。その理由については、後述する石塀と石蔵の章で詳述されていますので、そちらをご覧ください。

高畠石の丁場と地主・石工の関係

以上のように、安久津・二井宿地区は高畠石が豊富にそして多様な方法で利用されました。その理由を探るため、石切丁場との関係をみていきます。

安久津・二井宿地区は、小字により西から安久津･鳥居町･駄子町（以上、安久津）･山居前･上駄子町（以上、二井宿）に分けられ、味噌根･沢福等・瓜割の３丁場と距離が近接しました。

沢福等丁場は、良質な石材が採れる丁場とされ、硬く風化が少ないことから、敷石・塀など外構用に重宝されました。また瓜割丁場は、沢福等の後継として採掘が開始された新しい丁場で、唯一山麓部に位置することから移動や搬出の利便性が高く、沢福等に次ぐ質の高い石が採れました。一方味噌根丁場は、山頂部にほど近く、石材が柔らかく風化が激しいため、外構への利用が住民から敬遠されるなど、丁場ごとに石の性質や利便性が相違します。

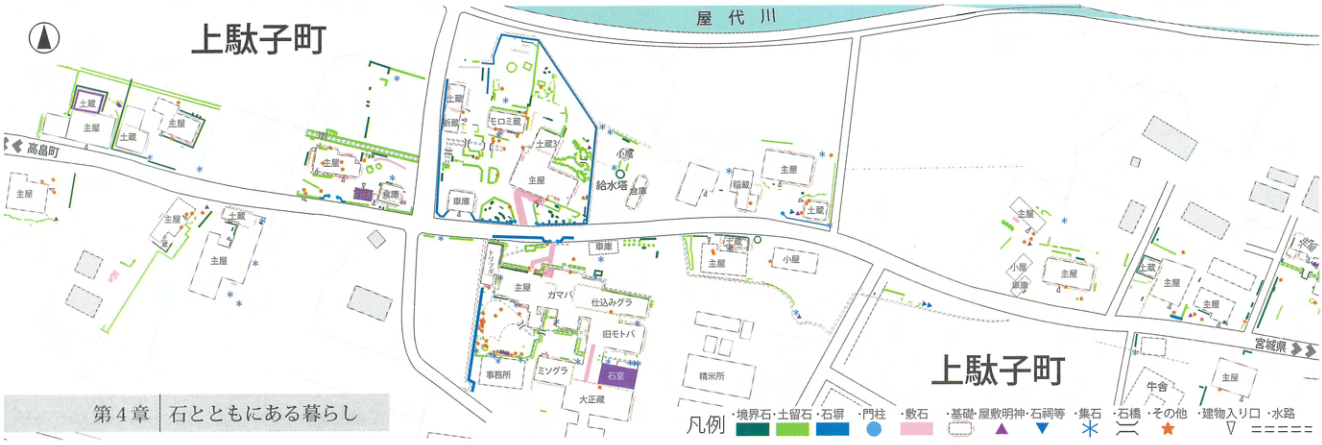
石工と丁場地主の密接な関係

これらの丁場は、安久津・二井宿地区において沢福等は少なくとも 4 戸、瓜割・味噌根は各 1 戸の地主が所有し、沢福等の地主は鳥居町・山居前、瓜割の地主は駄子町、味噌根の地主は安久津に居住しました。一方石工は、冬季の農間仕事として従事する兼業が多く、聞き取りによれば調査範囲において石工経験者を有する家は 33 戸で全体の 2 割強に当たり、特に鳥居町（14 戸）と駄子町（11 戸）に多く居住しました。このうち採掘した丁場が判明する石工は 19 戸あり、味噌根丁場は 1 戸のみと少ないものの、沢福等丁場は 12 戸､瓜割丁場は 10 戸で二分し、両方で働いた石工も 4 戸みられます。

これを集落ごとにみると、安久津に居住する石工は味噌根丁場で働いた人に限定されますが、他の地区は沢福等と瓜割で従事した石工が混在します。詳細にみると鳥居町と山居前は沢福等の石工が多い一方、駄子町は瓜割の石工が多数を占めて異なります。この傾向は、味噌根丁場の地主が安久津、沢福等丁場の地主が鳥居町と二井宿、

	味噌根		沢福等		瓜割		全体	
	石工	丁場地主	石工	丁場地主	石工	丁場地主	石工	丁場地主
安久津	1	1		1			3	2
鳥居町			6	2	3		14	2
駄子町			2		4	1	11	1
山居前			3	1	2		3	1
上駄子町			1		1		2	
全体	1	1	12	4	10	1	33	6

地主･石工家の所在地　数字：戸数



瓜割丁場の地主が駄子町に居住するという各丁場の地主の居住地と一致し、石工は集落に居住する地主の丁場と密接な関係を持ったことがうかがえます。

採掘料として丁場地主の家に蓄積された石材

次に、石工経験のある 33 戸の石材利用をみると、採用した種類数は 1 戸あたり平均 6.6 種の石が利用され、石工以外が 5.7 種であることと比較すると石工家の方が多様な方法で石材を利用したといえます。特に階段・敷石、基礎石の採用が 75%を超え、生活類や庭石類など加工を要する利用や集石が 6 割以上でみられます。

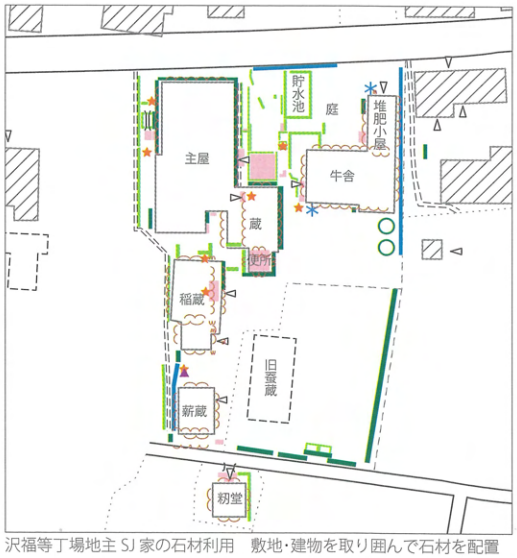
一方、丁場地主の 6 戸では、種類数が 9～12 種と多く、1 戸を除き石塀を有します。沢福等丁場の地主である SJ 家（鳥居町）を例にみると、敷地境界や全建物の周囲に連続して石を配置するほか、石塀が前面と側面の 3 ヶ所にあり、敷地内の 2 ヶ所に石を備蓄するなど、大量の石材を用いています。これは、石工が丁場地主に対する採掘料を現金だけでなく石材でも払ったことが影響したと考えられ、丁場地主の家に多くの石が集積された結果といえます。

地区の特性によって相違する石材利用

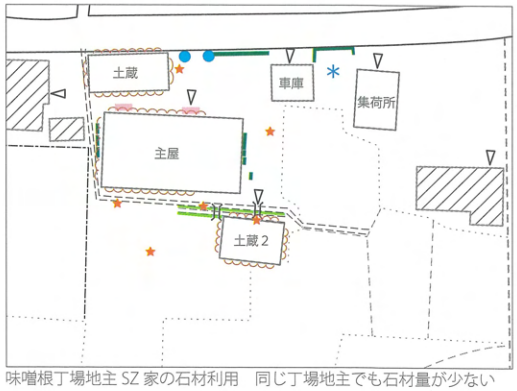
SJ 家では、聞き取りにより利用年代をみると、稲蔵・薪蔵など付属屋の基礎石やサイロを除き明治期にほぼ現在の姿になっていることから、遅くとも明治期には現在みられる石材の用法が確立したといえます。

一方、味噌根丁場の地主である SY 家（安久津）の場合、種類は 10 種と多いものの、水路の土留石は一部のみで、敷地の境界石も前面側に限られます。安久津では地主以外も、明治期以前から居住した家の石材利用が平均 6.3 種で他集落より少ないことから、味噌根石が外構に適さないという特性が関係したといえ、安久津で石材利用が少ない理由と考えられます。

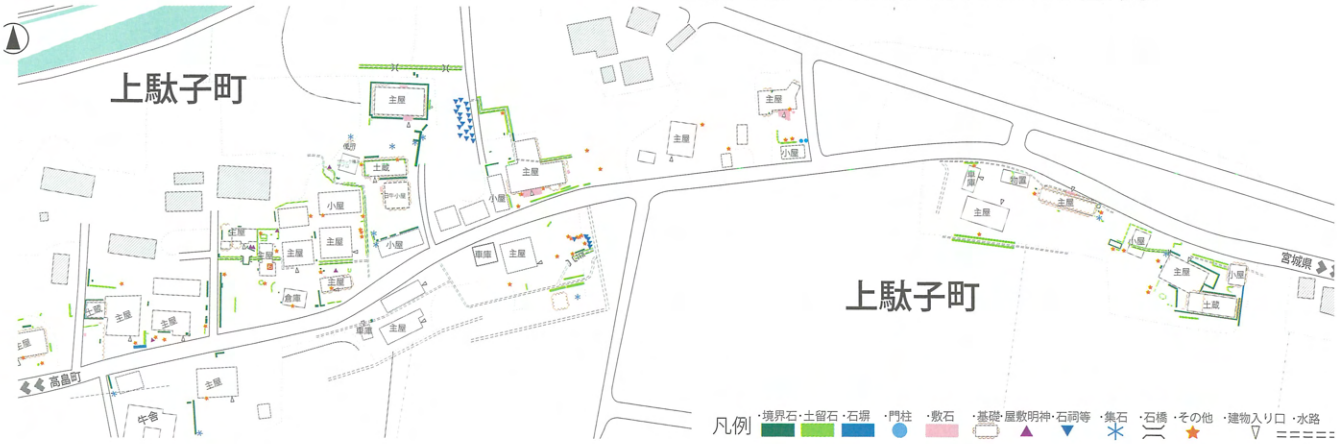
したがって安久津・二井宿地区における石材利用は、地区ごとに密接な関係を持つ丁場の特性が集落ごとの石材利用に影響を与えたといえます。（長田）



沢福等丁場地主 SJ 家の石材利用　敷地・建物を取り囲んで石材を配置



味噌根丁場地主 SZ 家の石材利用　同じ丁場地主でも石材量が少ない



変化する石塀のカタチ

高畠では稀な石塀

一般的に石材産地の町並みには、石で造られた塀や門柱が数多くみられるのが特徴として知られ、例えば高畠石と同じ凝灰岩の産地である栃木県宇都宮市徳次郎地区では、通りに面して石塀が密に配置される町並みがみられます。
では、沢福等丁場、味噌根丁場、瓜割丁場の 3 つの石切り場と距離が近く、それらの丁場で採掘した方が多く居住する安久津・二井宿地区では、数多くの石塀があるのでしょうか。

調査をしてみると、石塀（石を 3 段以上積む例）やそれに付属する門柱は 146 戸中 36 戸と極めて少なく、石の町特有の石塀が連なる景観はみられません。では、石材産地である高畠町では、なぜ門柱や石塀が少ないのでしょうか。その疑問の答えを導くため、石塀の形に注目するとその理由や歴史的背景が関係していることが判明しました。



栃木県宇都宮市徳次郎地区の町並み　街道に沿って石塀を密に配置する。

5 つの形式に分けられる石塀

調査地でみられた石塀全 76 ヶ所の積み方をみると、主に 5 つの形式に分けられます。その形は、板塀と組み合わせる「板塀連結型」（5 ヶ所）、「一二八（いちにいはち）」と短い角石を格子状に交互に積み上げる「混合型」（3 ヶ所）、短い角石を上部 2 段目のみに配置する「一部混合型」（33 ヶ所）、接合材を用いて全面に角石を積み上げる「整形型」（18 ヶ所）、ほぞや接合材無しで角石を積む「野積み型」（17 ヶ所）の 5 種類です。このうち野積み型以外は石に額縁の加工を施し、門柱を付属する例が多いのが特徴です。

積み方でわかる建築年代

これらの形式ごとに、聞き取りにより年代が判明する 37 ヶ所で傾向をみると、整形型は明治期以前から現在まで渡って建築されていますが、板塀連結型と混合型は明治期以前の古い時代に建てられる一方、一部混合型は大正期以降、野積み型は昭和 40 年代以降の建築に限定され、建築年代により石塀の形が異なります。



「板塀連結型」 明治期以前
45×30×240 ㎝の巨大な門柱



「混合型」 江戸末期以前
風化した石材に歴史を感じる



「一部混合型」 昭和 57 年　皆川石材店施工　笠石と門柱が付属



「整形型」 平成 9 年頃　瓜割石引地石材店施工　基礎石の転用

石塀普及のきっかけ



「野積み型」 昭和年 40 年代
山から採った石を積み上げる

このうち、整形型・一部混合型・野積み型の 3 種は、昭和 40 ～ 60 年代に主屋の建替えや付属屋の取壊しの際に造られたものが多く、これは羽越水害（昭和 42 年）による屋代川の増水によって多くの建物が床上・床下浸水の被害を受けたことが強く影響したといえます。また、街道との接道面の敷地区域が道路拡張により変更されたこと、それに伴い道路面が上昇し水除けや雪除けが必要になったこと、高度経済成長以降、家計が安





雪除けとして機能する石塀　冬は建物や庭木を除雪から守る

定してきたことなど、様々な事象がきっかけとなり昭和 40 年代以降、石の町特有の石塀の景観が少しずつ形成されました。

一時保管場所として

注目されるのは、野積み型の石塀が前身主屋の基礎石を転用して建てられることで、OS 家では「石塀はわざと仕上げをしないで積んで置いている。石を新たに買うと高いし、もう一回削れば新品になるため、今後別の場所で使うこと考えれば仕上げをしないで積んだ方が便利だから。」というように、後の転用を考えて一時的に保管する目的で石を野積みで置いており、石を貴重な財産として捉える高畠ならでの石材への価値観が表れています。



SJ 家の敷地背面にある石塀　昔は隣家で基礎石が足りない場合、この石塀の石を貸して、後で同じ大きさの石を返してもらったとか。そのため手前と奥で石の色味も異なります。

憧れの的であった石塀

明治期以前の昔から石塀を持つ 4 戸は、全て石切り丁場の土地を所有する地主か、広い農地を有する大地主であったことが特筆され、石塀は当初は有力家でのみ持つことができたといえます。MS さんは「昔は石塀を持つ家は米をたくさん持っている家の証だ。俺も憧れていたから真似して建てた。」とお話しをして下さり、



大笹生地区に残る石塀の小路　石の町の往時の姿が垣間見える

石塀＝財力という図式がここでは認識されていました。

財力の象徴から機能性へ

以上のように石塀は、明治期以前はごく限られた家でのみ建てられ、財力の象徴として石塀が存在し、高畠町のステータスシンボルの一つであったといえます。昭和 40 年代以降、災害や経済成長をきっかけに、従来の石塀への憧れだけでなく、水除けや雪除け、防犯や意匠性など石塀の機能的側面も重視されたことで、少しずつ一般的な家にも普及しました。石塀の形には、住民の方々の石塀への思いや意味という目に見えないカタチを読み取ることができます。



石塀の建設は基本的に 1 間（1818mm）単位で行われ、「一二八」を主に用いるが、材の長さが異なる場合、小口面のみを合わせて施工します。また石塀は、門柱・笠石（塀の上部に乗せる石）・額縁（石の側面に切り込み施す加工）を持つ例が最も格の高い形式とされます。



AA 家の曲線が美しい石塀　昭和 50 年代　安久津地区に居住した山田石屋の施工。十字路に沿って伸びる美しい R の曲線は、施工技術の高さがうかがえ、二井宿側から安久津へ入る街道の玄関口に相応しい石塀といえ、見所の一つ。

それぞれの石蔵

高畠町の石蔵は少ない

現在、高畠町では 14 棟の石蔵を確認しています。これは石の町としては少ない数で、二井宿街道沿いには 3 棟しかみることができません。他の凝灰岩産地では多くの石蔵が建てられています。なぜ高畠では少ないのでしょうか。その理由は、石蔵の建て方や建築動機などに隠されているようです。

石蔵の建て方

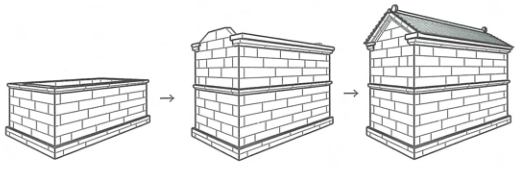
まず石蔵の建て方についてみていきます。石蔵をいくつか施工した石屋の引地兼二さんによると、初めにコンクリート基礎を造り、その上に下石を置きます。使う石は、高畠町で使われる「一二八」です。そして、1 階部分の石を積み、四隅は井桁積みで組まれ、その他は上下で石の目地が合わないようにするとのこと。他の家の仕事との兼ね合いもあり、およそ 1 日に 2~3 本のペースで積み上げるそうです。1 階部分の石が積みあがったら、中に藁を詰めてシートをかけ、翌年に備えます。

2 年目は、1 年目と同様 2 階まで石を積み上げて上棟し、屋根をかけて、扉や窓をつけて完成します。屋根や窓を付けるのは、石屋の仕事ではなく、大工や鍛冶屋の仕事でした。一般的に木造建築は柱を建てて屋根を掛けるのが先ですが、石蔵では壁を積み上げて最後に屋根を掛けるのが特徴です。

石蔵の建築は、多くの場合 2 年間を有したそうで、石蔵を建てられる石屋は限られ、高度な技術が求められました。

洋風のモダンな石蔵

次に二井宿街道沿いの 3 棟の石蔵についてみていきます。



石蔵は壁から建てられる

まず、UK さんの家の石蔵は、高畠で最も古い昭和 24 年に建てられました。この石蔵は、屋根が平らな陸屋根で、壁や 2 階天井、天井廻縁が漆喰塗りで、天井に照明台座を設けるなど、西洋風の造りが特徴です。UK さんの父は、人のやりたがらないことをやる性格だったそうで、福島市にある大谷石の石蔵をみて「同じものを造ってくれ」とお願いしてモダンな石蔵が出来上がりました。


周りにツタが張る UK 家の石蔵

SH さんの家の石蔵は、昭和 32 年頃に建てられました。平入り 2 階建て、屋根は切妻造のトタン葺で、高畠町で最も多くみられる形式の石蔵です。ブドウのコンテナや家財道具を入れているそうで、地下にある貯蔵庫の穴倉には、以前味噌や醤油を入れていたそうですが、石蔵の隣にあった池から水がしみだしてきてしまい、使い物にならなかったそうです。

SH さんの石蔵は、自身の親戚にあたる石屋が建築しました。造る前には、S 石屋が造った石蔵を見に自転車で長井まで行ったそうです。建築の際は、SH さんも丁場から石を引いてく


SH 家の石蔵のある風景

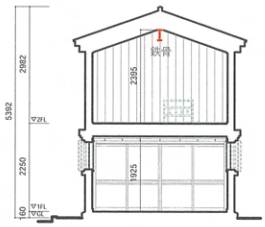
る手伝いをしたこともあったそうです。

近代化した石蔵

最後に、最も新しい昭和 45 年建築の AH 家の石蔵です。この石蔵は棟材に鉄骨を用いる造りです。また、使われている石も他の石蔵に比べて薄い石がつかわれています。床はフローリング材で、引き戸を備える居室のような内装です。これは、隠居した後にも住めるようにと造ったためとのこと。また、他の地区にあった石蔵に憧れていたため、自分の家にも建てたそうです。



AH 家の石蔵



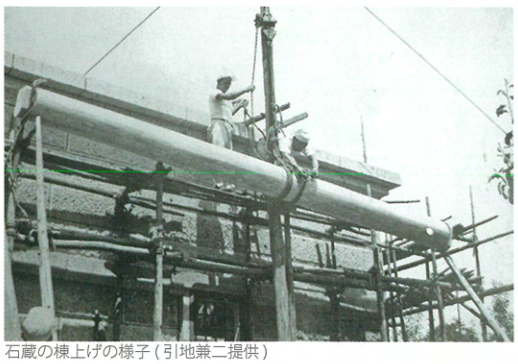
AH 家石蔵の断面図

石蔵が建った理由

大谷石など他の凝灰岩産地で多くみられる石蔵は、土蔵よりも防火性に優れているため建てられたとされ、かつ石蔵に使う石が豊富にあり、石蔵を建てられる石屋が大勢いたことなどから普及しました。しかし、高畠町では、いずれの家でも防火性は重視していません。KK 家（船橋）や TH 家（石岡）では、家に石が豊富にあり持てあましたため建てたとされ、石を多く所有したことや石蔵への憧れから建築されました。

旦那場と石屋、食米と石

しかし、石蔵が少ないという理由はこれだけではありません。石蔵を持つ家と施工した石屋には深い関係があることがわかりました。KK 家では、作った米を石屋に渡し、それと引き換えに石を貰っていたそうです。それ以外にも、石屋が小作人だった家、SH さんのように石屋が親戚だった家もありますが、いずれも米と引き換えに石を貰っていたそうです。



石蔵の棟上げの様子（引地兼二提供）

この関係性は、石屋にとって米を貰い食いつないでいけるという生活面だけではなく、渡した石を加工する仕事を後に受けられるという仕事面での利点がありました。そこから贔屓の石屋と旦那場という関係が生まれました。

石屋にとって米を得ることは非常に大変なことでした。基本的に米 1 俵は「一二八」10 本で取引されましたが、戦後の米高の影響で 1 俵につき 12 本まで値上がりするなど、食米を得ることはより困難になりました。その影響で、自ら田んぼを買う石工もいたそうで、石と米との交換という仕組みそのものがなくなっていき、石蔵を建てるきっかけがそのもがなくなりました。

高畠「だからこそ」

以上のように高畠町の石蔵は、土留め石や境界石など多く用いられる利用方法とは異なり、石蔵への憧れなど建てたいという強い意思や、米と石との交換という石屋との結びつきなどによって建築されました。しかし高畠石は、職人の手掘りによって現代まで採掘されため、「一二八」1 本の採掘に 1 日を要したように、石蔵に必要な材料が豊富に得られなかったため、普及しなかったと考えられます。

当時の暮らしがみえる石蔵

高畠町の石蔵は、建てられた当時の石屋と家々の関係や、石屋の暮らしを解き明かすことのできるものです。また、それぞれの家での建てられるまでのドラマや、高畠石への想いを強く感じることのできる建築物であると思います。これから先も、当時の姿や関わった人々の想いを感じさせるものとして、受け継がれていくことでしょう。（阿部）



調査は実測して図面におこす

水と生活と高畠石

水のある町並み

高畠の町並みを歩くと、水のある風景がよく目に入ります。その中でも水路や井戸はもちろんのこと、「イリガド」と呼ばれる洗い場が数多く残っています。「イリガド」は、「入川樋」と書き、水路から水溜めへと水を引き込んだものです。ここに流れる水は、上流から下流へ家々を経由して水が流れ、敷地内を縫うように張り巡らされた水路を通ります。

これらの水回りのシステムを構築する材料として、安久津・二井宿地区では今も高畠石が多く使われており、水と高畠石には強い関係性がみられます。ここでは、水と高畠石のある風景をみていきましょう。

イリガドの利用

イリガドは、水溜めの回りを高畠石で一間四方の方形に囲み積み上げたもので、一部に段差が設けられ水場へと降りることが出来る構造になっています。主に角石が用いられますが、水面より下の壁面には間知石が多く用いられ、50cm ほどの高さになります。中には意匠に凝った乱切合積みのイリガドもあり、家の個性が表れます。



角石で出来たイリガド　右側の水路からイリガドへ水がたまる仕組み



中には1辺が石垣で形づくられているものも

生活に欠かせないもの

家の中に水路を引き込み設置したもの、家の外に置かれているものなど、イリガドの配置は様々です。この相違は、その家の建築時期と関係し、比較的新しく移り住んだ家ではイリガドそのものがありません。

使用方法をお聞きすると、生活用水としてイリガドの水で野菜などを洗ったり、夏には野菜を冷やしたり、顔を洗ったり、と言った声が多く、中にはイリガドの中で青苧を浸したり、鯉を飼っていたというお話も聞かれました。また、牛乳を冷やすために使っていたという例もあり、同地域の代表的な生業である酪農との関わりもうかがえます。

このように、生活の一部として身近にあったイリガドは、上水道の普及に伴い少なくなりました。家の中にあったイリガドは蓋をし、イリガドを取り崩して埋める例もあるなど、インフラ整備や生活の変化と共にイリガドが活躍する場面は少なくなっています。



主屋の中に引き込まれた水路　流しとして使われた



主屋へと入り込むイリガド　基礎の下を水が抜ける

水路と高畠石

イリガドに水を引き込む際に必要なものが水路です。水路の側壁には角石の端材が多く用いられ、間知石を使用したものはあまりみられません。土留めとして角石を一段のみ積んだものが多くみられます。

水路の水源を辿ると、上有無川や下有無川などの河川から分水したもの、山の湧水を引いたものなどがあります。駄子町を流れる水路では、上有無川の水を、五百羅漢のある玉龍院のある付近から街道沿いへと引き込んでいます。

水の湧く地域では

二井宿街道沿いの駄子町の地域、特に街道より南の地域では、かつて地下水が自噴する水の豊富な地帯であったとされます。ほとんどの家には、河原で取れる玉石を積み上げて組んだ井戸が存在しました。井戸側の上部は、角石４枚で組まれるのが一般的で、その大きさ、組み方に違いがみられます。かつては釣瓶で水を汲んでいましたが、現在はホームポンプを用いて井戸水を利用する家も残っています。水道の普及により、使用をやめて埋められたものが多いものの、かつては洗い物にはイリガドの水を利用し、飲み物には井戸の水を利用するといった使い分けがなされていました。

自然と共に生きる

AK 家のイリガドを覗いてみると、ハヤやメダカなどが泳ぐ姿が見られます。水辺にはトノサマガエル、それを狙った蛇、そして隣接する小屋の板壁にはヤゴの抜け殻など、様々な生物が生息していました。生活を写し出すイリガドが、自然を切り取った風景にもなっているのです。

水という資源を有効に活用するため、技術の進歩に合わせて様々な工夫がなされてきました。その一つの形が家々で共有し利用されてきたイリガドであると思います。高畠石は、そんな水の利用に貢献をしてきているのです。（會田）



角石と間知石を合わせた複合型の水路



角石で出来た水路



井戸の内部





家の敷地をまたいで伸びる水路
明治 21 年の地籍図には、二井宿街道沿いに横に走る水路のみが描かれています。利便性から、家を建て直す際に、家の奥にも水路が引かれるようになりました。その際、上の写真のように家の中を水路が通るようになります

ナツカワのある庭

庭にある大きな石「ナツカワ」

「ナツカワ」とは何でしょう。至極簡単に言えば大きな石をくりぬいたものです。このナツカワは、一説では藩政時代に下級武士たちが庭に置いて楽しんでいたのが始まりとされています。当時お金のなかった武士にとって、庭を楽しむことは贅沢でした。そんな中、小さなスペースで庭に彩りを添えることのできるナツカワはさぞ魅力的だったのでしょう。しかし、ナツカワは名前の由来、使われ始めた時期など多くのことが謎に包まれています。



大きさも形も様々なナツカワたち

ナツカワ or イシブネ or ミズブネ？

まず呼称についてみてみます。まちあるき調査の際、ナツカワのようなものを指さし「これは何ですか？」と家主の方に聞いてみると、「ナツカワ」と答える方が最も多く、次いで「ミズブネ」と呼ぶ方もいらっしゃいました。また、高畠石の採掘を最初に始めた大笹生では「イシブネ」と呼ばれています。「ナツカワ」「ミズブネ」「イシブネ」同じものでありながらなぜ呼び名が異なるのでしょうか。その理由は使い方にあるようです。

水とともにあるナツカワ

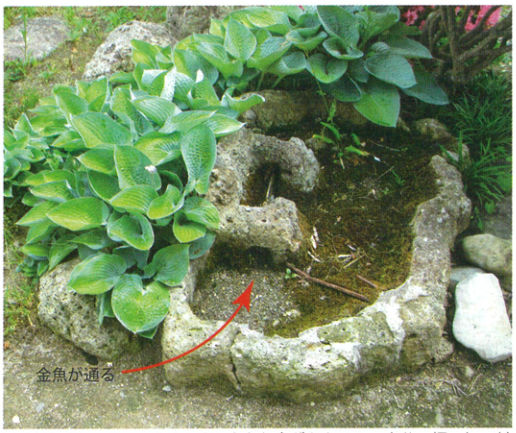
使い方をみると、安久津・二井宿地区のナツカワの多くは、水を溜めて金魚を鑑賞する例や水草を浮かべる例があり、水に関わる使い方がされています。「ミズブネ」も同様の用法で利用され、ナツカワが「舟」の形に似ているためそう呼ばれているそうです。これらの中には、庭の土留めやひっくり返されてオブジェになっているものなどもあり、目的と異なる方法で利用される例もありました。ナツカワの底部や側面は自然石に近いため、裏返すと他の庭石と見分けがつかず、調査時に大変苦労した曲者です。



たくさんの金魚が気持ちよさそうに泳いでいる

「ナツカワ」由来は“夏”？

ではなぜ「ナツカワ」と呼ばれるようになったのでしょう。結論を言ってしまうとわかりません。SJ 家では、夏に小川の魚を入れるから、というお話があり、他にも夏に川の代わりにする、という方もいらっしゃるのでどうやら夏と川に関係があるようです。水を吸いやすい凝灰岩である高畠石は、冬になると凍み割れしてしまうので、夏に由来があるのは自然なことではないかと思います。（冬期間の凍み割れを防止するため、ナツカワの底部には水抜きの穴があけられており、冬になる前にここから水を抜いておきます。）



SS 家のナツカワ。ナツカワを買うとお金がかかるので自分で掘ったのだという。埋まってしまっているが、金魚が通るための穴が開いている

このように、多様な使い方や呼び方をされるナツカワですが、昔は大変高価なものでした。MH さんのように「金持ちじゃないからうちには無い」という方もいました。そのため、大きなナツカワを持っている家ほど裕福だとされ、ナツカワは庭を彩ることは勿論、その家のステータスシンボルとしての一面も持っていたのです。

ナツカワは宝舟

使い方といえば、大笹生で面白いお話を聞きました。ナツカワに水を入れて庭に置くことは同様ですが、SK さん曰く「ここではナツカワを宝舟に見立てて蔵にその舳先が向くように置いて家の繁盛を願った」とのことで、これは安久津・二井宿地区ではみられない使い方です。



側面に平行に入る石目。家から庭を見たときにこの面が見えるように置く。このような石を柾石と呼ぶ

加えてナツカワには、防火水槽としての役割もあり、明治期には同地で火災が多く、防火用水として機能したことがうかがえます。また、安久津・二井宿地区ではみられない大きいナツカワが数多くみられることが特筆され、最大で5mを超えるものがあります。ナツカワが防火用水として利用されたことに加え、石切り場と距離が近く運搬が容易であったため、大きいナツカワを持つことができたのではないでしょうか。



中心部に軽石で島をつくる



島の上に松を植えることも

独自の庭園文化

そしてこのナツカワ、実は珍しいものです。私たちはまちあるきの活動の一環で高畠石と同じ凝灰岩の産地であり、大谷石で知られる栃木県宇都宮市大谷地区、房州石で知られる千葉県富津市金谷地区に行ってきました。しかし、そのどちらでもこのナツカワを見つけることは出来ませんでした。また、私は天童の出身ですが高畠まちあるきの活動で初めてナツカワというものを知りました。庭園で用いられる手洗鉢はどこにでもありますが、ナツカワのように深く大きく掘られているものはありません。

このように、ナツカワを庭に置くというのは高畠町や置賜地方独自で発展した庭園文化といえます。

ナツカワを持つ方には、「大きくて邪魔だ」という方もいましたが、他地域に誇れる庭園文化の一つなのです。どうか大切に、ずっと使い続けてほしいと思います。（高橋）



まちあるき調査史上最大 5mのナツカワ。人と比べるとその大きさがよくわかる



土場に集められたたくさんのナツカワ（平成 23 年撮影）

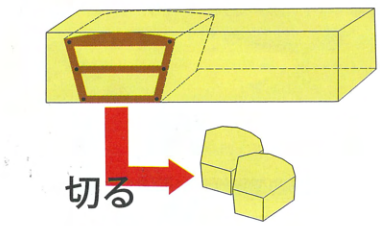
失われたサイロを求めて

牛の飼料貯蔵庫サイロ

サイロとは、牛の飼料貯蔵庫です。飼料は主にトウモロコシの葉や茎で、この飼料用のトウモロコシを各家で育てて収穫し、細かく刻んだものをサイロに詰めて貯蔵しました。これは全て人力で行うため重労働であったとされ、当時のことを SJ さんは「サイロ上部まで飼料を運ぶのが大変だった。しかも飼料が中でまんべんなく行き渡るように均す人は葉っぱまみれになってやんだぐなる」とお話ししてくださいました。飼料は他にもビール粕など用いた例もあり立派な乳牛を育てるために様々な工夫が行われています。

サイロの造り方

加工石工である引地兼二さんによると、石造サイロは「一二八」の石を扇状の木枠で型取り、それを木枠に沿って切り落としたのを積み重ねて造ったそうです。切った石は角ばっていますが、並べると綺麗な円筒になります。サイロの石を切る際は、最初に完成形の規模をイメージして造ります。職人芸です。



さまざまな形の小屋掛け

サイロの上部分には、「小屋掛け」が付き、円筒形サイロの上部に箱型で切妻の屋根を掛けます。小屋掛けに付く扉から飼料を出し入れしました。この小屋掛けは、一般的に箱型ですが、ドーム型や八角形のものもありました。中には使わなくなった木小屋をそのままサイロに乗せて小屋掛けとして再利用したものもありました。


八角形の小屋掛け付き。

また、サイロは地表面に出ている部分が容量のすべてではありません。地下に深い穴が掘られており、多くの飼料を保存することが可能でした。

大人数で行った飼料詰め作業

サイロに飼料を入れる様子が『置賜酪農の歩み』に記されています。サイロに飼料を詰める際は、人夫を 25 人、葉や茎を切る機械を 10 台集め、機械一つにつき人夫を 2 人付け、余った 5 人の内 3 人はサイロの中に入るなどして飼料を詰める係、残りの 2 人は切った葉や茎を養蚕の籠に入れて運ぶ係をしたとされます。この作業は夏～秋にかけて行われ、聞き取りにおいても TS 家では「8 月頃に飼料詰めを行った」とされます。


昭和 10 年代に撮影された飼料詰めの様子（写真アルバム　置賜の昭和）

県内最初の石造サイロ

高畠町のサイロを語る上で欠かせないのは、SJ 家の石造サイロです。SJ さん宅では明治 33 年頃から酪農を始めたとされ、現在その酪農で用いる石造サイロが 2 棟現存します。このうち北側のサイロは大正 9 年に建築したとされ、高畠町だけでなく山形県内初の石造サイロだったそうです。このサイロは直径 7 尺、高さ 10 尺と規模が大きいのが特徴です。年代が下り牛の頭数が増加したため、昭和 14 年に高畠を代表する石工・山田武七によって南側にサイロを増築しました。その施工の際、上部の小屋掛けは連結する形に改築され、現在の姿となりました。

石造サイロが日本で初めて造られたのは大正元年で、そのサイロが現在北海道大学農学部第二農場で国指定重要文化財として保存されています。SJ 家の 2 棟が連結する石造サイロは、全国的にも特異な形式であり、建築年代が大正

年間と石造サイロとして極めて古く、現在も当時のまま利用できることは、歴史的価値の高い貴重な遺構です。高畠町だけでなく山形県を代表する文化財であり、生業の近代化を示す文化遺産としても価値の高いサイロといえ、これからも大事にしていいただければと思います。



SJ さん宅の県内最古の石造サイロ　2 連式で現存するサイロは貴重
長い時間を過ごしたためか、蔦が幾重にも重なる



米鶴酒造の給水塔はサイロと同じ造り

サイロの行く末

では、安久津・二井宿地区には石造サイロがどのくらいあったのでしょうか。調査地域では 9 棟と少なく、酪農が盛んな地区としては物足りない数です。しかし、コンクリート造サイロと合わせると 19 棟、さらに解体されたサイロがあったという家は聞くことができた家だけでも 37 棟にものぼり、以前は多数存在したことがうかがえます。

現存する石造サイロをみると、先述の SJ 家の二連式サイロの他、旧 AS 家の大規模サイロなど、サイロといっても一つひとつ形が異なります。そんな様々な種類のサイロは、当時の高畠町の景観を担っていたのではないでしょうか。



HT 家には解体したサイロの石が今も残る

コンクリート造サイロの導入

しかし年代が下ると、遅くても昭和 20 年頃から安価で耐久性の高いコンクリート造サイロが導入されるようになり、石造サイロは造られなくなりました。加えて、昭和 46 年をピークに酪農をする家が減少し、それに伴いサイロを使用する家も少なくなったのです。

転用された石造サイロ

では、そのたくさんあったはずのサイロは、一体どこへ消えたのでしょうか。取り壊したサイロの石を持つ TS さんは「歴史公園の石畳に転用するため解体した」とのこと。サイロの石の規格が、敷石に丁度良かったようです。実は、石造サイロの行方を聞くと、昭和 60 年代の歴史公園の工事の際にサイロを壊して持っていったという話を多く耳にします。現存している石造サイロは少なくなっていますが、現在も違う形で私たちの生活の中に溶け込んでいます。

（瀧口）



OT 家では今でも二棟のサイロが仲良く並ぶ

屋敷明神は語る

屋敷の神様として

屋敷明神（高畠での呼称）はご存知ですか。民俗辞典によると「屋敷地内、あるいはその周辺に奉斎されている神々の総称。多くは木・石の小祠・小堂や建碑などに、いわいこめてあるが、石組だけで祭場を標示したものもあり、ときには樹木・自然石を依代とするものもある。祭祀対象は、きわめて雑多であり、またその祭神の性格・祭祀方法などもさまざまである。」とあり、幅広く色々な形で祀られているようです。

高畠の屋敷明神は、その殆どが高畠石で作られているのが特徴で、基本となる形式があるものの細部意匠はそれぞれ異なり、呼び方も「ヤシキミョウジン」だけでなく、様々みられます。

笠からみえる個性

次に屋敷明神の形についてみていきます。

屋敷明神は、上から笠、胴、台の３つで構成され、最も形の個性がでるのが笠です。

笠とは、住宅でいう屋根にあたる部分で、自然石のままのものと屋根の形状に加工したものがあり、大きく 2 種類に分けられます。後者は、神社などでもよく見かける正面の屋根が伸びた「流れ宮造」の形式を採るのが一般的です。この笠の高さは、胴の 2.5 倍とされ、そのため胴の大きさで笠の大きさも決まります。面白いですね。また、流れ宮造は全て平入りの屋根ですが、調査では僅かに妻入りの例も見掛けました。しかし、石屋の HK さんは「そんなことねーべ！それは雪の重みとかで屋根が落ちた時に、間違って乗せたのではないか。」とのことです。気になった方は、ぜひ、ご自宅の屋敷明神を確認してみて下さい。


自然石でできた笠


加工石でできた笠

胴の穴で分かる神様

屋敷明神が家にあるけど、何を祀っているのかわからない。そんな方は、屋敷明神の胴の穴に注目してください。その形で、祀っている神様が判別できます。下図に示すように、胴の穴の形式は様々あります。まず、宝珠という涙滴形の穴はお稲荷様、四角形の穴は屋敷神様や弁天様を祀っているそうです。

また高畠では、弁天様やお諏訪様、金比羅様など、様々な神様を屋敷明神として祀っています。今までの調査で判明した屋敷明神の中では、お稲荷様を祀っているお宅が多いようです。お稲荷様と言えば、「稲」の字を持つことから五穀豊穣や商売繁盛、子孫繁栄の神様としても知られています。高畠では農業に従事している方が多いため、作物の実りが豊かになるようにという願いを込め、お稲荷様を祀っているお家が多いのではないでしょうか。


丸型


宝珠型


ハート型


四角型


釣鐘型


猪目型

「オミドヂョウ」ってなに？

高畠の屋敷明神の最も大きな特徴としてオミドヂョウが挙げられます。オミドヂョウとは、屋敷明神の胴の部分にする赤い前掛け（柄物や他の色の前掛けもある）のことで、「大御戸帳」と書きます。高畠では、大御戸帳をした屋敷明神が多いということが分かりました。これにはどういった意味があるのでしょうか。

大御戸帳と似た言葉に、「御戸帳（ミトチョ

ウ)」があります。これは仏像などを安置する厨子に掛ける布のことで、格式を高め、大切なものを隠すという使い方をします。したがって大御戸帳は、祀る神様の格式を高める装飾的な用法と、大切にして神様を外部に見えないようにするベールのような役割を持つといえます。

また古くなった大御戸帳の処理の仕方は、各家によって異なることも特徴で、正月の御柴灯（おさいとう・おさいど）で焼く家、胴の穴の中に入れて自然に朽ちるのを待つ家など様々です。大御戸帳を新たなものに交換するときに、古いものの上に重ねて巻くという例が多くありました。積み重なった大御戸帳の枚数だけ、大切にしている人の思いも積み重なっているのだと感じ、嬉しく思いました。


胴の穴の中に大御戸帳


積み重なる大御戸帳

お祀りの仕方

各家で屋敷明神のお祀りの仕方の違いはほとんどありませんでした。その祀り方は①大御戸帳を新しいものに交換する。②お供え物（赤飯、白米、餅、団子、小豆、など…）をする。③お神酒を上げる。④灯明を上げる。⑤お参りをする。の５つの行程が一般的で、住職や神主が来てお参りをする、本家の屋敷明神にお参りに行くという方もいました。また、祀っている神様の好物をお供え物にする例もあり、お稲荷様は油揚げ、水神様は卵をお供えします。

一方祭日は各家で異なり、春と秋、盆と正月にお祀りをする例が多く、現在も行う家が多く残っており、伝統的な習俗が継承されています。

祠の設置場所や方角について、鬼門の北東に置く例もありましたが、各家によって様々で規則性は特にないようでした。

伝えていきたい屋敷明神

屋敷明神は家と信仰が結びついたものです。現在みることが少なくなったものの、高畠では高畠石製の屋敷明神を多く見掛けることができます。引っ越してくる時に屋敷明神も一緒に持ってきたという話もあり、時代を越えて大切にされたことが分かります。しかし、あるお宅では「おばあちゃんから祀り方を教わらなかったから、どうしたらいいのか分からない」といった声があるなど、少しずつ信仰が失われ、お祀りが途絶える家が増えているのが現状です。

高畠石の屋敷明神は、高畠ならではの貴重なものです。石製のため木製のものより古いものが現代にも残っており、先人との繋がりを感じさせてくれます。高畠石の屋敷明神とそのお祀りの両方が存在して、初めて後世に受け継がれていくと思います。世代間を越えて伝えることが歴史の継承や家の繁栄に繋がるかもしれませんし、屋敷明神からのご利益があるかもしれません。そのため、これからもずっと大切にして欲しいと思いました。（笹原）


私の好きな屋敷明神①　自然石の笠に積み重ねてきた年月を感じる


私の好きな屋敷明神②　立派な流れ宮造の笠と自然石の台から威厳が溢れ出ている


私の好きな屋敷明神③　３つの屋敷明神がこじんまりと並び、何だかほっこりする光景

生活と共にあった高畠石

石風呂


今は少なくなった石風呂（倒置）


人ひとりが入るのやっとの大きさ

現在殆ど残っていない石風呂。安久津・二井宿地区と大笹生地区で１つずつ現存していました。AI 家では 40 年ほど前まで使われており、思い入れがあって大切に保管されていました。じいさんいわく「狭い風呂に子供と一緒に入った。背中を石にこすり付けられてなかなかいいもんだったよ」。ばあさんいわく「薪は焚きにくいし、なかなかお湯は沸かないし、すぐ冷める。いいもんじゃなかったね」。おやじいわく「カマドのところ（銅板）に触れると熱くていい思い出ないね」と、三者三様の想いを語ってくれました。石の町ならではの思い出の逸品です。

旗竿石


「一二八」を縦において用いる旗竿石


横に添えるように立てる


高さは人の身長前後

旗竿石は祭り旗や鯉のぼりをあげる際に用い、竿の付け方が山形市内と異なり特徴的です。

石臼


玄関先など外構に置かれた石臼


植木鉢の台に


敷石として埋没

石臼はその名の通り石でできた粉引き臼です。しかし高畠町では利用しなくなった石臼が家の「外」に置かれています。特に多いのが玄関先にぽつんと置かれる石臼や庭でオブジェとして用いられる石臼です。なぜ石臼を外に置くのでしょうか。「石臼置き」は歴史が古く、姫路城や佐渡相川・米原市曲谷（石臼産地）、東本願寺別邸庭園など各地に例があり、近世には広く石積みの意匠として用いられるようになりました。これらはそれぞれに象徴的な意味があるようですが、みなさんはどんな想いで石臼を置いていますか。

コエヅカ


堆肥置場として現在もつかわれるコエヅカ

酪農の名残としてコエヅカが多数残っています。現在はぶどう栽培に係る堆肥場として利用され、角石をコの字型に積み上げて利用します。近代以降広まった酪農は、稲作と結びついて有機農業の里―高畠の顔となりました。高畠石のサイロと堆肥置き場は、近代の高畠の人々が自然を有効に利用しながら地域に根ざした生業を営んできた証であり、「高畠らしさ」を代表する遺産ではないでしょうか。

万力台


自転車修理で活躍する万力台

70 年以上使っている万力に高畠石を合体させた多機能万力台。自転車のフレーム矯正にも使える細工がなされ、高畠石が様々な生業と共に親しまれています。

エサ入れ


オーダーメード豚のエサ箱

先代が石屋に依頼して作った豚のエサ箱。現在は敷地境界として家の軒先に置かれ、用途が不明でした。特殊な高畠石をお持ちの方はご一報下さい。（長田）

第五章　石の里の魅力



石の里の魅力
—伝えたいもの、こと—

伝統技術を伝えてきた最後の町

凝灰岩のような軟石をセットウ、タガネ、チョウナを用いて切り出し加工する技術は、今から1,700 年前（古墳前期）に遡ります。目的とする製品や道具は時代とともに変化しましたが、その技術は各地で脈々と受け継がれました。石材産業の長い歴史をもち「石の町」と称される所は全国各地にあります。凝灰岩では、栃木県宇都宮市大谷（大谷石）や千葉県富津市金谷（房州石）、静岡県伊豆半島西海岸の伊豆青石などが有名です。

これらの地域は都市の近代化に伴う需要の高まりと、重貨物の広域輸送に便利な海運・鉄道と結びつくことで販路を拡大し、一大生産地となりました。同時に産業としての組織化、機械化が進行し、伝統的な技術が急速に失われていきました。また、生産規模の小さな所は産地間競争に晒され、石材需要の低迷もあってほとんどが消滅していきました。その中にあって、高畠は細々とながらも近年まで伝統の石切り技術を伝えてきた日本で唯一の町だったのです。

石材産業の衰退とその要因

高畠石の採掘加工は、最後までホッキリやサシパによる手作業で、世帯単位の経営が基本でした（昭和 49 年名取市の業者が瓜割で機械採掘。数年で撤退）。したがって 10 か所余りあった丁場はいずれも小規模なものでした。石工は専業だけでなく、農業と兼業する者も大勢いました。後者は間知石をとる石工に多かったといわれます。流通範囲は町内を中心にほぼ置賜盆地内に限られており、全国でみるとどこにでもあった小規模生産地の姿です。

高畠石の生産も時代の趨勢に漏れず、瓜割山では終戦直後をピークとし、昭和 29 年には約 30 人、同 45 年に 18 人、同 50 年に 6 人と減っていき、平成 19 年に後藤初雄氏 1 人となり同 22 年の引退とともに手掘り技術は 1,700 年の幕を閉じたのです。40 年代の急激な減少の背景には、米価の高騰やこの時期にピークを迎えた農家の出稼ぎ労働、高度成長期の若者のサラリーマン化による後継者不足、セメント系資材の普及による需要減などがほぼ同時に進んだということがありました。これは全国規模の社会経済変化であり、そこへの適応ともいえます。

この地が現代まで伝統技術を伝え得たのは、石材の産状に合わせた小規模分散的な労働・経営形態が近代化の抑止要因になってきたことや、生産・流通・消費のバランスが適正規模であったことだけでなく、石を切る人、使う人の精神文化が大きかったように思われます。

高畠石を切る人、使う人

ある山石工は「朝起きたら山に行って石を切る。夕方になったら家に帰る。ただそれだけだ」と。かつて山にはそんな仲間が他にもいました。町並みには一部安価な県外産石材やブロックも入っています。しかし「石はやっぱり高畠石がいい」という言葉を何度も聞きました。何に使うにも「町並みの風景」になじむと、そしてこの地域独特の価値観（かつて「一二八」10 本と米 1 俵を等価交換）とあこがれ意識（地主の家に石材が集積）が背景にあるように思われます。いずれにしても、少々値が高くても地元の資源を持続的に利用しようという人々が、現在の町並みを作り、伝統的な石切りを存続させてきたといえるのではないでしょうか。

伝統技術は過去のものか

伝統的な石切りが途絶えたとはいえ、高畠にはまだたくさんの採掘経験者がいます。平成 23 年 10 月に開催した第 1 回石工サミットでは角石と間知石採りをそれぞれ再現してもらい、私たちは間近でその技に触れ、職人たちの言葉を聞くことができました。これは他の地ではもはやできないことです。先端技術がもてはやされる時代に石切りのような伝統技術は時代遅れなものとして捨て去ればよいのでしょうか。否、もし仮に現代や未来に活かす価値があるのならばわれわれは大きな財産を持っていることになります。

「石の里の魅力」は素通りしては分からない

二井宿街道を歩くと道路沿いに石塀のある家が何軒もあります。これとて車で素通りすればほとんど気になりません。石塀や石蔵が林立す

る宇都宮市徳次郎地区の景観には圧倒されます。これに比べれば石材量は圧倒的に少ないです。

まず高畠には全国で唯一「一二八」という長尺の石を建築土木にふんだんに使う景観があります。石塀や基礎、境界、土留め、護岸、入川樋、旗竿石などに用いられ、中でも角石を野積みした石塀は特徴的です。道路際の境界石は腰をおろして話し込むのにちょうどいい高さです。

第２は生業(酪農、果樹、養蚕)や生活(囲炉裏、火鉢、井戸、風呂、臼など)、庭（なつかわ、立石など)、信仰（屋敷明神など）のあらゆる所に高畠石が利用され、それらが各家に密度濃く集積していること。民具博物館のように石を通して伝統的な生活を垣間見ることができます。

第３は再生の美学とでもいうべき、初期の機能を失っても転用、再利用し使い続ける姿勢です。具体像は前章に譲ります。

最後は貯石という習慣です。境界石や野積みの石塀は体のいい貯石であるし、転用、再利用も貯石の一種です。要は資源を無駄にせず、何かの時に使うという構え、備えといえます。

このような利用形態から、これまでは家を建て替えても即座に石はなくならず、母屋の新築や堆肥場の解体等によってかえって石が表に露出することになります。したがって集落景観は全体の調和を保ちながらゆっくり変化しているように見えます。モノの背景を読み解いて知る魅力は漠然と眺めるだけでは見えてきません。

最後に「高畠石の里」の現代的価値について３点を述べ、まとめに代えたいと思います。

①高畠石の石工たちから学ぶこと

現代は科学技術の発達を志向し、経済的豊かさ、便利さ、安全な社会を目指しています。わたしたちは自然を知識として学習することは増えましたが、リアルな実感を伴う対象として直接触れる機会は減っています。自然物（木、火、土、石、金属、水、日）をとらえる身体感覚、これを扱う身体技能は衰える一方です。

石切りの仕事には鍛冶や道具作りもあって、あらゆる自然物と向き合う労働が含まれています。五感を使う仕事なので必然的に身体感覚が研ぎ澄まされていきます。角石切りは重さ５kg余りのホッキリを幅の狭い溝に一振り一振り4,000 回も振り落とす気の遠くなるような作業です。丁場の張り詰めた空気の中で全身の筋肉が踊るように波打ち、規則的な息遣いが壁面にこだまします。過酷な労働ですが、人間の肉体と敏感な身体感覚をバランスよく鍛える労働の本質がそこにあるように思われます。電車に乗っても車窓の景色を見ない。歩きながらイヤホンで音楽を聴く。青信号に安心しきって横断する。意図的に感覚を遮断して過ごす若者たちへのメッセージが含まれています。

もうひとつは技を習得していく過程です。石工たちが見習いの間、ひたすら同じ動作を繰り返し、ある時気がつくと一人前になっていたという身体訓練の経験です。昨今の教育では行為の目的を事前に示すのが当たり前で、自分で与えられた訓練の意味を悩みながら見つけていくことはほとんどありません。しかし、クリエイティブな仕事をしていくためには、わからなくても挑戦してみる姿勢が大事だと言われます。

②再利用と貯石の文化

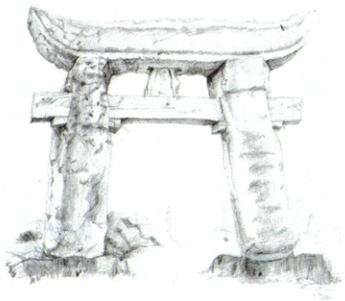
限りある資源を持続的に使うこと。石の里の住民たちは当たり前のようにやってきたことです。異なる資源を関連付けて循環的、持続的に利用していく。有機農業の先進地である高畠町ならではの文化といえます。近年は近代住宅への建て替えに際し、町外の土建業者が基礎石や庭石等の石材を丸ごと回収し、廃棄する例もあると聞きます。集落や町全体で貯石、再利用するシステムがあってもいいのかもしれません。

③高畠らしい技術、生業、精神が育んだ町並み

高畠石にも黄や緑、青、白とそれぞれ色味があります。自然石と手掘りの石が醸し出すこの柔らかい質感が高畠石の特徴で、里山に囲まれた高畠の自然、そこで長きにわたり育まれてきた多様な暮らしの痕跡が重層する風景によくなじむと思います。先人達が伝えてきた「石の里の魅力」をこれからどう継承し、新しい時代の町づくりに生かしていくか。それは次世代に託された課題です。私たちが住民の皆さんから教えていただいたように、これからもよそ者と、世代を越えた人々との対話の中から、他のどこの石の町にもない高畠らしい風景が創出されることを願っています。（北野）

謝辞

「高畠まちあるきプロジェクト」は地元の多くの方々の御協力によってなしえたものです。高畠町教育委員会ならびに遠藤周次、佐藤仁一、伊澤良治、古川和夫、引地道晴の各氏にはひとかたならぬご支援を賜りました。記して感謝申し上げます。



なお、本プロジェクトでは、平成 25 年度に高畠町内にある鳥居の悉皆調査を実施し、約 100 基の石鳥居を確認しました。今後補足調査を行い、その成果を平成 26 年度末にブックレットとして刊行する予定です。あわせて御教示賜りますようお願い申し上げます。

参考文献

臨時議員建築局編『本邦産建築石材』大正 10 年
小山一郎『日本産石材精義』龍吟社 昭和 6 年
東置賜郡教育会編『東置賜郡史』下巻 昭和 14 年（昭和 48 年復刻）
日本民族学協会『日本社会民俗辞典』第 4 巻 誠文堂新光社 昭和 35 年
真壁仁「石切工」『続手職 現代のたくみたち』やまがた散歩社 昭和 46 年
『山形県史』資料篇 16（近世史料 1）山形県 昭和 51 年
『高畠町史』中巻 高畠町 昭和 51 年
『置賜酪農の歩み』置賜酪農協同組合 昭和 55 年
『宇都宮市史』第 7 巻 宇都宮市 昭和 55 年
『角川日本地名大辞典 山形県』角川書店 昭和 56 年
米沢百科事典発行委員会『米沢百科事典』サンユー企画 昭和 57 年
『土地分類基本調査』赤湯・上山　山形県　昭和 58 年
神崎彰利「元禄 5 年出羽国置賜郡屋代郷検地」『明治大学刑事博物館年報』14 昭和 58 年
『高畠町史』下巻 高畠町 昭和 61 年
山形県教育委員会編「石工（石切）」『山形県の諸職（伝統的手職）』昭和 62 年
高柳俊輔「高畠町の石工技術－最後の伝統的石切り職人」東北芸術工科大学歴史遺産学科 2009 年度卒業論文 平成 21 年
野添憲治「瓜割石切場の後藤初雄さん」『まんだら』東北芸術工科大学東北文化研究センター　平成 21 年
『山形交通高畠線』高畠町郷土資料館 平成 6 年
『お蚕さまのこと』高畠町郷土資料館 平成 10 年
『たかはた・石の文化をさぐる』高畠町郷土資料館 平成 14 年
『大谷石百選』大谷石研究会 平成 18 年
『房州石の歴史を探る』第 1 号 石のまちシンポジウム委員会 平成 21 年
府中市郷土の森博物館『府中市郷土の森博物館ブックレット 13　お稲荷さんの世界』府中市郷土の森博物館 平成 22 年
「山形県高畠町町勢要覧（平成 25 年）」http://www.town.takahata.yamagata.jp/001/tyouseiyouran.pdf

古写真出典一覧

『写真アルバム置賜の昭和』いき出版
『高畠むかしの写真帖』（高畠町立図書館所蔵）

執筆者一覧

北野博司　Kitano Hiroshi
東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター研究員・准教授（歴史遺産学科兼務）

長田城治　Osada Joji
東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター研究員・ポストドクター

阿部美鈴　Abe Misuzu
東北芸術工科大学歴史遺産学科平成 24 年度卒業

會田智美　Aita Tomomi
東北芸術工科大学歴史遺産学科 4 年

笹原理美　Sasahara Satomi
東北芸術工科大学歴史遺産学科 2 年

髙橋佳帆里　Takahashi Kaori
東北芸術工科大学歴史遺産学科 2 年

瀧口友香　Takiguchi Yuka
東北芸術工科大学歴史遺産学科 2 年

挿絵作成

大山龍顕、吉川千賀子、本間かりん

調査参加者一覧（五十音順）

・研究員

大場詩野子、大山龍顕、岡田靖、長田城治、北野博司

・学生

會田智美、青山真彩美、阿部さやか、阿部美鈴、荒川千晴、石井紀子、伊藤佳奈恵、今川大志、岩松絵美、鵜浦脩平、上野遥奈、上田優喜、及川茉莉子、小笠原一穂、岡野志穂理、海藤元、加藤彩華、香取千暁、菊池駿貴、河内彩華、吉川千賀子、木下紗予、櫛引理沙、小菅満広、小西洋平、笹原理美、佐竹美香、佐藤恒介、佐藤神武、設楽舞華、菅沼信輝、髙橋佳帆里、髙橋智美、髙橋里奈、高柳俊輔、瀧口友香、千葉翔也、永井泊、中村円香、濱谷優芽、濱須脩、福島明恵、藤田悠暉、本間かりん、三好明日美、村田遥、村田悠奈、渡邊みなみ

・高畠石の会

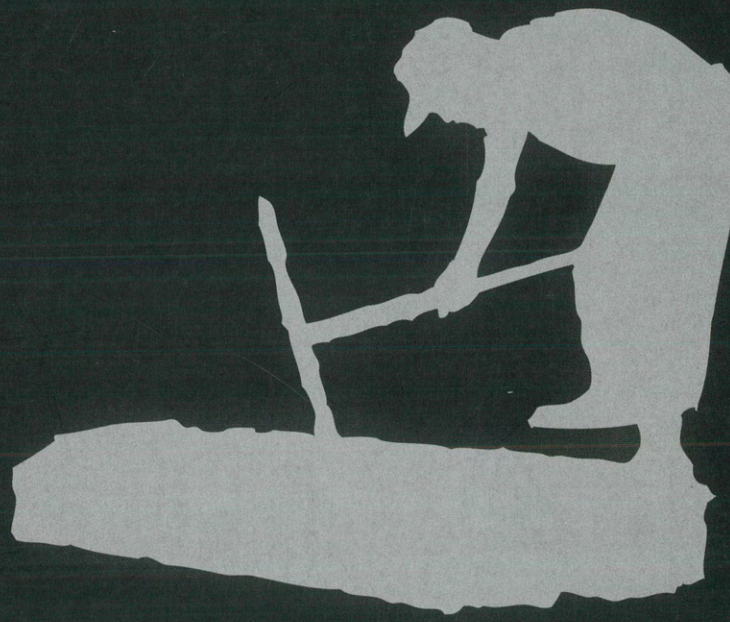
伊澤良治、石田暢子、井田秀和、遠藤周次、高橋正志、半田清、引地道晴、古川和夫、吉田歓、渡部桂

まちあるき 24 回、63 名延べ 358 人の手によって調査が行われました。

平成 26 年 3 月 31 日発行

高畠石の里をあるく

東北芸術工科大学
文化財保存修復研究センター
〒990-9530　山形県山形市上桜田 3 丁目 4 番 5 号
Tel：023-625-2204
Fax：023-627-2303
E-mail：iccp@aga.tuad.ac.jp
HP：http://www.iccp.jp
印刷　株式会社　大風印刷
山形県山形市蔵王松ヶ丘 1-2-6



高畠石の里をあるく

web 公開におけるおことわりについて

本書中において、石工職人のインタビュー箇所（P16～P25）があります。個人的な事情等を多く語っていることから、web 上における公開は控えさせていただいております。

ご覧になりたい方は、本書の所蔵図書館等へお問い合わせください。